

「バタヴィア港(1)」(2017年07月21日)

バタヴィア港。

オランダ東インド会社(VOC)が建設したバタヴィアの町の表玄関がそのバタヴィア港だ。今ではジャカルタとその名を変えているバタヴィアの港はかつて、ジャカルタ北岸の中央部、旧バタヴィア市街の北端にあるスダクラパ(Sunda Kelapa)にあった。

ジャワの他地方やスマトラ、スラウェシ、あるいはカリマンタンから資材を運んできたフィニシ帆船が集まっている、あのアンティークな雰囲気満ちた埠頭がかつてのバタヴィア港だったのである。しかしスダクラパ港は今でも生き続けている港だ。

古来からの帆船が積荷を輸送している姿は歴史の生き証人としての相貌を垣間見せてくれるものだが、スダクラパ港の機能はそれだけにとどまっていない。毎日およそ三百隻のフィニシ帆船が集まってくるその埠頭とは別に、ずっとその奥に入っていくとジャカルタ湾にそのまま面した埠頭があって、もっと大きな動力船が接岸して荷役しているありさまを目にすることができる。スダクラパ港は文化遺産であることにとどまらず、現代のインドネシア経済にも依然として関与しているのである。

もちろん、かつてのバタヴィア港にジャカルタ湾に面する埠頭はなかった。バタヴィア港というのは、そのフィニシ帆船が集まっている埠頭を指している。かつてインド洋から東アジアまでの海と海岸をわがもの顔に疾駆したVOC商船隊の本拠地であるバタヴィアの港があんなものでしかなかったのか、という意外な念に襲われたひとは、きっとわたしだけではあるまい。

フィニシ船の集まっている埠頭と対岸が形成している細長い水路は、両岸が埋め立てられた結果、北へ北へと伸びていったものだ。古い歴史の当初には、スダクラパ港もなければパサルイカン(Pasar Ikan)の出っ張りもなく、更にはブンジャリガン(Penjarangan)地区の大きな半島部すらなかった。そこにあったのは、砂浜と海、そしてボゴール丘陵からジャカルタ湾に流れ込んでくるチリウン川(Sungai Ciliwung)の河口だけだったのである。

ジャワ島の川はほとんどが土砂を運んでくる。放置すれば川は浅くなって船舶の航行に障害をもたらす。浚渫作業はひっきりなしに行われた。今でさえ雨期が近づいてくれば、ジャカルタの水害常習地区を流れる川という川では、川の底ざらえが行われている。チリウン川が住民にもたらす宿命がきっとそれだったにちがいない。

チリウン河口を浚渫すれば、すくった泥や土砂は両岸に積み上げられたことだろう。年々同じことが行われたなら、そこに水路が出現するのは容易に想像できるはずだ。こうしてバタヴィア港はオランダ人がハーフェンカナル(Haven Kanaal)と呼んだその水路とともに、沖へ沖へと伸びて行った。

そもそも、パジャジャラン王国時代の有力港のひとつだったカラパ(Kalapa)、1527年にファタヒラ(Fatahillah)別名ファレテハン(Faleteahan)による征服でバンテン王国の属領として生まれ変わったジャヤカルタ(Jayakarta)、また1619年にヤン・ピーテルスゾーン・クーン(Jan Pieterszoon Coen)に征服されてVOCのアジアにおける根拠地としての運命をたどるようになったこのバタヴィアの町。そのいずれの時代においても、帆船による通商の時代にもっとも重要な位置を占めたのが港であり、町は港を支えるための存在だった。その意味で、町と港の一体性は疑いようのない絶対条件であったと言える。バタヴィアの町が今で言う旧バタヴィア市街であったころのスダクラパ港は、バタヴィアの町が南部へ広がっていくに連れて規模

のバランスが崩れてしまい、ついには1886年にずっと東のタンジュンプリオツ(Tanjung Priok)に大型海港の新設を強いる結果となった。町と港の一体性はそんな事実にも反映されているようだ。[続く]

「バタヴィア港(2)」(2017年07月24日)

パンラゴ山(Gunung Pangrango)に源を発するチリウン川がボゴール丘陵地帯を下って北上し、猖獗の熱帯湿地原を形作りながらジャワ海に、いやジャワ海の一部をなしているジャカルタ湾に流れ込む、その河口にできた天然の要港がカラパの、そしてジャヤカルタの港だった。そこがバタヴィア港となっても本質的な違いは生じなかったとはいえ、オランダ人は湿地や川を埋め立て、運河を掘り、また川を改修するなどして、かれらが熱帯の地で営む暮らしを改善することに努めた。そのためにバタヴィア時代に入ってから、この地域一帯の状況は変化を続け、その変化の伝統はオランダ人が去ってからインドネシア共和国の中で営々と続けられている。

チリウン川が上流から運んでくる泥土は、長い年月の間に平地に堆積して川底を浅くし、洲を作った。雨季乾季の水量の差、定常的な川の氾濫。平地は一大湿地原となり、高まった小丘や固い土地がところどころに島のように浮かぶ。ジャカルタの地名の中に、rawa, pulo, tanjung などのような水に関連する地名がたくさん見つかることが、その事実を証明しているかのようだ。そのようにして形成されたジャカルタの地質は、豊富な地下水と水はけの悪さという、同じ根から出た便不便をかこつ宿命をこの地の住人に負わせているのではないだろうか。

港もその泥土の襲来から免れることはできない。チリウン川の河口や周辺の岸辺では、沖に向かって遠浅の環境がおのずと作られていく。河口に近いチリウン川一帯では、バタヴィア時代の初期まで水量次第で外洋船が乗り入れていたものの、日ごとに川底をせりあげてくる自然の猛威には勝てず、造船技術の進歩による船舶の大型化も相まって、陸地への接岸なしにボートやはしけによる沖合での乗降や荷役へと様式が変化していった。大海原を乗り越えてきた船は座礁しない程度に陸地に接近して投錨すると、乗客や貨物を上陸させるために小型船がその間を往復したのである。しかしそんな方式では、陸揚される貨物の大きさや重さに限界が生じる。外洋航行する大型船が直接陸地に接岸し、クレーンを

使って巨大な重量物を陸揚げできる港が必要となるのは時間の問題でしかなかった。こうして1886年にタンジュンプリオツ港が誕生し、バタヴィア港は海の玄関口としての使命を終えることになった。

1631年ごろ、VOCはバタヴィアの町の中央を貫通するチリウン川を改修してまっすぐな流れに変え、今日われわれが目にするあのカリブサール(Kali Besar)の姿になった。そのころ船はまだ市街の中まで進入し、川岸で荷役を行っていたようだ。河口近くの西岸には造船所が1632年に作られ、小型からせいぜい中型の船までを建造や修理してはカリブサールに浮かべていた。大型船の場合は、1618年以来VOCがプラウスリブのひとつオンルスト島(Pulau Onrust)に設けた造船所が使われていた。

ともあれ、VOCがアジアに築き上げた通商網の軸に位置付けられたバタヴィアには、東は長崎の出島から西は南アフリカのケープタウン、そしてテルナーテやバンダからペルシャ湾に至る各地の港からさまざまな物資が集まって頑丈に造られた大きな倉庫に蓄えられ、ヨーロッパで高い市場価値を持つアジアの産

品が年に一〜二度、強力な軍船に守られた大商船団の船倉に詰め込まれてアムステルダム指して出帆して行った。

一方では、VOCの商船は季節風に乗ってアジアの通商網を駆け巡り、ある港で買い付けた交易品を別の港に持ち込んで巨利をあげるという通商輸送活動を手広く行った。その当時バタヴィアは、アジアの富が集まるところ、アジアでもっとも繁栄する港のひとつと謳われた。そのオランダ人たちがやってくるようになった16世紀末のジャヤカルタの港はどのような様子をしていたのだろうか？[続く]

「バタヴィア港(3)」(2017年07月25日)

今のスダクラパ港の西側の対岸はパサルイカンと呼ばれる地区であり、パサルイカンの南縁をパキン通り(Jl.Pakin)が東西に走り、通りに沿って南側をカリパキン(Kali Pakin)という名の運河が流れている。パキン通りの東詰めは、スダクラパ港のゲートからまっすぐ南へ下ってくるクラブ通り(Jl.Kerapu)と更に南へ一路タマンファタヒラ(Taman Fata-hillah)を目指して下るトンコル通り(Jl.Tongkol)の三本の道路が形成する三叉路であり、三叉路の少し西が橋になっている。

この橋の下こそが、ジャヤカルタの町に沿って海に流れ込むチリウン川の、その当時の河口だった。つまり、そこに立ってハーフェンカナルに向かい、左手をパキン通りに添わせながら両手を開いたその線が、当時の海岸線だったということだ。その海岸線は時の経過と共に北へ北へと伸びて行って現在に至るというわけだが、それにしてもパキン通りとカリパキンの位置の不自然さに違和感を覚えるひとは、きっとわたしだけではないだろう。

クラブ通りとトンコル通りは百数十年もの歳月を経てきた道路で、地形に即した自然さが感じられるのに比べて、パキン通りはいかにもとってつけたような雰囲気がおおい立ってくる。パキン通りが作られたのは1930年代終わりごろであり、それ以前にあの場所を東西に横切る大通りは存在していなかったのだ。おまけにカリパキンの運河が掘られたのは1981年のこと。運河が掘られたことの必然性はそれなりに存在しているし、同様にパキン通りが建設された必然性も個々にあったということだが、それらがひとつの整合性のもとに造られたのでないという事情が、不自然な違和感を醸成している原因であるにちがいない。

1598年以来バンテンに買付人を置いて交易活動を行っていたオランダ人は、1611年にパゲラン・ジャヤカルタ(Pangeran Jayakarta = ジャヤカルタ王子)ウィジャヤ・クラマから許可を得てチリウン川東岸の湿地帯に貧相な建物を作り、ジャヤカルタでの交易活動を開始した。VOCの十七人会はバンテンに駐在していたヤン・ピーテルスゾーン・クーンを1618年に新総督に任命したので、かれは1619年に前任者から引き継ぎを受けて新総督の座に就いた。この新総督はビジネス競争が激しく且つ為政者による商業統制の厳しいバンテンでの交易活動をジャヤカルタに移そうと考え、計画の実施に着手する。

VOCがジャヤカルタにはじめて建てたチリウン川東岸の貧相な建物ナッソーハイス(Nas-sau Huis)を強固な石造りの商館に改修し、更にマウリティウスハイス(Mauritius Huis)を増築してその周囲を頑丈な石の城壁で囲み、湿地帯の中に浮かぶ強力な要塞を建設した。これが第一期カスティル(kastil = オランダ語 kasteel)である。

そこへ、後追いのイギリス人がオランダ人を追い落とそうとしてジャヤカルタへやってきて、パゲラン・ジャヤカルタと手を組んでオランダ要塞への攻撃姿勢を強め、チリウン川をはさんでVOCのカスティルと対峙する場所に頑丈な木造の商館を建設しはじめた。商館建物の完成が近づくと大砲を設置し、砲口をカスティルに向けたからオランダ人は怒り心頭に発した。そんな至近距離から砲弾を撃ち込まれてはたまらない。

その年12月、カスティル勢は川をおし渡って完成間近いイギリス商館を急襲し、建物を灰にってしまった。そのイギリス商館が建てられた場所というのは、後のバタヴィア時代にVOC造船所が設けられた地点に当たる。[続く]

「バタヴィア港(4)」(2017年08月02日)

1628年と1629年にマタラム王国のスルタン・アグン(Sultan Agung)がオランダ人に奪われたバタヴィアに向けて二回の軍事遠征を行ったものの、ロジスティクスの失敗や疫病のために兵士たちがバタバタと病に倒れるといった事情が災いして、強固な城壁に囲まれたバタヴィアの征服は実現しなかった。

そんなジャワからの大軍を迎え撃たなければならなくなったVOCは1627年にバタヴィアの防衛能力を格段に高める対策を余儀なくされた。クーン総督は第一期カスティルを、そのほとんど同じ場所で規模を何倍にも拡張した要塞に建て直したのである。それが第二期カスティルだ。

その第二期カスティルが建てられていた跡は、地図の上からなぞるほうがわかりやすい。ジャカルタ北部の地図を見ると、まずカリブサールの東側にカリチリウン(Kali Ciliwung)がほぼそれと並行して流れていることに気が付くにちがいない。カリチリウンは北上してロダンラヤ通り(Jl.Lodan Raya)に近付いてから西側に傾きを深めて2百数十メートル直進し、再び傾きを元に戻して北に2百メートルほど流れた後、直角に流れを変えて上で指摘したクラブ〜パキン〜トンコル通り三叉路の橋に向かって流れていく。オランダ人がやってきてカスティルを建設したころの海岸線がどこにあったのか、これはその仮説を支える傍証のひとつでもあるにちがいない。

さて、そのカリブサールとカリチリウンが形成している四辺形が、われわれの想像の目の中に見えてきた。南縁がどこにあるのかははっきりしないものの、正四辺形をそこに描くのはむつかしくない。そう、その四辺形いっぱいにはクーン総督が改修させた第二期カスティルが建っていたようだ。

ヨーロッパの要塞、つまり城は周囲を堀つまり濠で囲まれているスタイルが伝統パターンのひとつでもある。水の豊富なバタヴィアのカスティルも当然のようにそのパターンが踏襲された。つまりカスティルの南側にも濠が造られていたのである。カリルアルベンテン(Kali Luar Benteng)という名の濠がその正四辺形のカスティルの南縁をなし、カリブサールとカリチリウンおよび海岸線で四周を囲まれた第二期カスティルの全貌が、こうして浮かび上がって来た。

カリルアルベンテンは1936年に埋め立てられてしまい、現在のような地形に変化した。実に奇妙に感じられる事実としては、もともとチリウン川の本流だったものが改修されてカリブサールとその名を変え、カスティルの濠とするためにチリウン川の支流が作られてオランダ時代にはスターツバイテンフラフツ(Stadsbuitengracht)と呼ばれていた水路が、今ではカリチリウンとしてチリウン川の名を冠しているということ

があげられるにちがいない。

その第二期カスティルも、今では跡形もない。イギリス軍のジャワ島進攻に備えて種々の作戦計画を立てた第三十六代総督のダンデルス(Dandaels)が「イギリス人に奪われてかれらの防衛力を高めるよりは・・・」という判断を下して、バタヴィア防衛上の要衝であるカスティルとバタヴィアの市街を取り巻く城壁を1808年に取り壊してしまったためだ。取り壊されたあとのカスティルはしばらくそのまま放置されていたが、1835年になって残骸は取り片づけられ、きれいに整地されてカスティル広場(Kasteelplein)に姿を変えた。だがすでに南に向かって発展していったバタヴィアの街はウエルトフレーデンを中心とすら新たなアップタウンが確立されていて、カスティル広場の有用度は高まらなかったにちがいない。[続く]

「バタヴィア港(5)」(2017年08月03日)

結局のところカスティル跡地は経済活動の中に組み込まれて行くという結末をたどることになった。そこには倉庫や工場が建てられるようになり、カスティル広場の中を抜けてバタヴィア港へ通じる道路が作られて、この一帯は変哲のない産業地区になってしまう。その道路はオランダ時代にカスティルプレインウエフ(Kasteelpleinweg)と呼ばれていたが、独立インドネシアではトンコル通りと名前が変化している。

カスティル広場の対岸には、1632年にVOC造船所(Timmerwerf der Compagnie)が建設された。クラブ通り～パキン通り～トンコル通り三叉路の橋から西に向かってパキン通りを進むと、カリパキンを隔てた向こう側にVOCと大書された田舎の学校の校舎のような建物が見えてくる。そこへ渡るためにカリパキンをまたいでいる橋がそのうちに左手に現れる。そこは南へ下る一方通行の道路、カカップ通り(Jl.Kakap)だ。そしてカカップ通りの左側にある校舎のような建物が造船所の跡。

このカカップ通りとカリブサールには含まれたおよそ5千平米の土地に乗っている南北120メートル東西40メートルのこの建物は、VOC初期に造られた建築物に共通する、豪勢な素材をたっぷり使ってきわめて頑丈に作られた古い木造建築物のサンプルであり、VOCの権勢をしのばせてくれるものだ。この造船所は1809年に閉鎖されて民間に売却され、しばらくは木工ワークショップとして使われていたが、何度も転売を重ねて最終的に倉庫として使われていた。

1999年12月、オリジナル素材を大部分そのまま残しながら、この二階建ての建物は改装を終えた。チークの太い柱や分厚い天井板をふんだんに目にするこの建物の中に身を置けば、あたかもVOCが権勢をふるった時代にタイムスリップして行くように感じられてくる。改装なったこの建物はガラガンカパルVOC(Galangan Kapal VOC = VOC造船所)として、レストラン・カフェ・土産物ギャラリーなどのコマースサービスを提供する観光スポットになっている。ガラガンカパルVOCの中庭は、かつて木工職人やクーリーたちが造船修理を行っていた場所であり、完成した船がそこから川面に向かって押し出されていた。今は、背の高い壁がカリブサールとこの中庭の間を阻んでいる。静かで情趣豊かなこの中庭にたたずむと、すぐ近くにある喧噪のパキン通りがまるで別世界のように思われてくる。数百年の時間を一気に超えて、繁栄を謳歌するバタヴィアの時代にタイムスリップしてみたいはいかがだろうか？ ちなみに、ガラガンカパルVOCと表示されているそのVOCは、Very Old Cafe のアクリムである由。

カリブサールの水面を見てもカリパキンを見ても、まるで墨のような水の色にはうんざりさせられるひと

数多いにちがいない。世界最長のゴミ箱とジャカルタ都民が自嘲するチリウン川はありとあらゆる汚物を流し去る水路として昔から住民に利用されてきた。住民人口の増加とそれに伴って発生する経済活動が生み出す廃棄物が幾何級数的に増大していくことは目に見えている。つまり独立インドネシアが地方部諸種族のジャカルタに向かうアーバナイゼーションを促した歴史こそが、ジャカルタの河川汚染の歴史につながっていると言えるにちがいない。[続く]

「バタヴィア港(6)」(2017年08月04日)

四百年前にはじめてこの地を訪れたオランダ人が目にしたチリウン川は、今われわれが目にするものとはまるで大違いのきれいに澄んだ水だった。16世紀末にジャヤカルタを訪れたオランダ人の書き残した記録を読み返してみることにしよう。

この町の中央を流れる川の水は澄んでいてきれいだ。水夫たちはこの川の水を汲んで、船に蓄えている。ジャヤカルタは低湿地だが、景観は美しい。チリウン川の支流に囲まれた、河口に近い東西5百メートル南北およそ1千メートルの狭い四辺形の土地に築かれたこの町は、民家ばかりか王宮までもが木と竹とそして竹で編んだ壁で作られており、ジャワの他の町と同じように稚拙でみすぼらしい。

陸地はいくつかの島に護られた入江になっており、川には数百トン程度までの商船なら十隻は入ることができる。そんな船はたいいていマラヤ・中国・日本などからやってきたものだ。5百トンを超えるヨーロッパ船は海岸で投錨しなければならない。

住民たちはたくさんの鮮魚や干し魚を持って船まで売りに来た。町の周辺にある水田や豊かなヤシの木、あるいはサトウキビなどは住民にありあまる食糧を供給しており、水夫たちもかれらから食糧を買うことができた。

王宮は四辺形の土地の東側に、川岸に沿って造られ、主要な門と門の間は竹矢来でつながれている。いくつもの大きな建造物からなる宮殿も竹と竹編み壁で造られており、屋根は棕櫚葺きだ。王宮の北側にはジャワでアルナルン(alun-alun)と呼ばれている広場があり、広場の周囲に設けられた市場には、朝夕物売りが商品を並べている。

王宮や市場に面した川の対岸(つまりチリウン川東岸)はプチナン(Pecinan)と呼ばれる中国人居留区で、中国人は原住民のものより頑丈な家を建てている。中国人はレンガや瓦、漆喰などの使われた住居に住んでいるが、その一方でおよそ2千世帯すなわち1万人ほどいる原住民の住居は竹と竹編み壁で造られており、沼地の上はもとより地面の上であっても、高潮や雨季の浸水に備えて立てられた竹の柱の上に構築されている。

町の外側は沼地とジャングルであるため住民の住居は川岸に集中しており、内陸部にはほとんどだれも住んでいない。なぜなら内陸部のジャングルはワニ・サイ・象・トラ・野牛・大蛇・コブラ・ムカデ・ヒルなどの危険な生き物で満ち溢れており、原住民でさえよほどのことがないかぎり、好きこんで足を踏み入れるような場所ではないからだ。

原住民の成人男子はほとんど全員が短剣や竹槍で武装しており、王は領民から即座に4千人を徴集できる。王宮に沿った川には王の持ち船が4~5隻停泊している。それらの船はジャワでよく目にするものと

類似の構造をしており、下は漕ぎ手、上は兵士が乗るようになっているものと思われるが、停泊中の船は上部を覆って見えないようにしてある。

この町では良質のコショウがたくさん手に入る。ほかにも安息香・メース・樟脳・宝石などが交換されている。ポルトガル人はここまでやってこないで、取引はやりやすい。今の王はコショウを年間三百袋しか売ってくれないが、将来はきっと、もっとたくさん増えるにちがいない。

ジャヤカルタの町は現在のカリブサールとカリジュラケン(Kali Jelakeng)に挟まれた土地にあり、パゲラン・ジャヤカルタが住む王宮は今のコピ通り(Jl.Kopi)と西カリブサール通り(Jl.Kali Besar Barat)の交差点周辺だったように思われる。その北側の鉄道線路辺りが市場になっていたようだ。

ジャヤカルタでももちろん交易は行われていた。安息香・ダイヤ・琥珀・エメラルド・翡翠・陶器・沈香・絹布・真珠・大巻貝・極楽鳥の羽などアジアの珍品とともに、ヨーロッパで需要の大きいコショウもあった。ただ、いかんせん、ジャヤカルタはバンテン王国の属領なのであり、いわば分家にあたるジャヤカルタが本家のバンテンを差し置いて繁栄するようなことを、バンテン王国が許すはずがなかった。

交易市場の規模は格段の差があり、そしてその事実がウィジャヤ・クラマの敵対心を煽っていたのも、まちがいのないところだろう。[続く]

「バタヴィア港(7)」(2017年08月07日)

1511年にマラッカを征服したポルトガル人は、そこを根拠地としてアジア海域の通商支配に向かう。言うまでもなくスパイス貿易がその中で目玉になってはいたが、決してスパイスを本国に運び込むことだけを目的にしていたわけではない。ヨーロッパで高く売れるアジアの珍品を本国に運ぶことも、そしてアジアのある国で仕入れた物品がアジアの別の国の港で高く売れるのであれば当然、その取引に精力を注いだ。眼前に横たわっている富をわざわざ見逃す手はないということだ。

スنداと呼ばれるジャワ島西部地方には、昔からスندا族が作った王国が存在していた。だがスマトラ島のスリウィジャヤ(Sriwijaya)王国の勢力が伸びてくればその支配に降り、東ジャワのマジャパヒツ(Majapahit)王国が攻勢に出てくればそれを宗主に仰ぐといった、覇権にあまり縁のない穏やかな王国として長い歴史を生き延びてきたようだ。

ところが15世紀末になって新たに勃興してきたイスラム王国がヒンドゥ＝ブッダ王国のマジャパヒツを滅ぼしてジャワ島のイスラム化を推進しはじめたことから、ジャワ島西部に確固たる地盤を維持してきたヒンドゥ＝ブッダ勢力であるスندا王国はイスラム勢に直接対峙しなければならなくなる。

王国の東端にあってイスラム勢と境を接するチマヌツ(Cimanuk 今のインドラマユ)の町には、16世紀に入るとイスラム教徒が目立って増加してきたし、スنداの諸港を訪れるジャワの商船に乗っているのはムスリムがメインを占め、そのような人的接触によって領民への影響が広まっていくのを完全にシャットアウトできるものでもなかった。

このスندا王国は北岸部にバンテン、カラパあるいはスنداクラパ、ポンタン(Pontang)、チグデ(Cigede)、タムガラ(Tamgara)、チマヌツなどの港を持ち、ポルトガルに征服される前のマラッカ繁栄期にはマラッカ海

峽を通過する幹線交易路の分流を受け入れ、またマラッカで消費されるコメ・肉・魚・野菜・果実などの食糧ならびに国際交易品であるコショウや奴隷の輸出も行っていた。それらスダ諸港の筆頭はバンテンだったようで、バンテンは輸出基地であるとともに海運業センターとして栄えていた。

マラッカを奪い取ったポルトガル人は、マラッカに集まってきていた通商航路を維持させることに努め、イスラム勢の矢面に立たされたスダ王国とは特に軍事協定を結んで共通の敵に対決する姿勢を示した。マラッカ現地司令官(Capit?o-mor)のジョルジ・ダルブケルケ(Jorge de Albuquerque)はエンリケ・レメ(Henrique Leme)を代表者とする使節団をカラパへ派遣して1522年8月21日に協定の調印を行なわせ、またチリウン川河口東岸に協定内容を記した石碑を建てさせた。バンテンでなくカラパが協定調印の場に選ばれたのは、カラパのほうがスダの王都に近い距離にあったことと、そして時のスダ王であるプラブ・スラウィセサ(Prabu Surawisesa)が王位に就く前に今のジャティヌガラからチリウン川河口一帯の領主であったという事情が関わっていたようだ。トメ・ピレス(Tom? Pires)の旅行記には、スダの王都はカラパの港から二日の行程だったと記されている。

スダ王国にとって、バンテンはもっとも繁栄する商港であり、政治的にはカラパが重要な港という立場に置かれていたと理解することができそうだ。

ところが、スダ王国がポルトガル人と結んだ協定が、イスラム勢力のトップにいたドゥマツ王国(Kesultanan Demak)を強く刺激した。王国第三代目のスルタン・トランゴノ(Tranggono アルファベットの綴りでは Trenggono, Tranggana などさまざま)は妹婿のファタヒラ(Fatahillah)に命じて、スダ王国とポルトガル人の合作を分断する作戦に出た。

マラッカからやってくるポルトガル人と西ジャワ内陸部のスダ王国の接触を阻むために海岸部を占領すること、つまりバンテンとカラパというスダ王国の二大港を奪取することである。[続く]

「バタヴィア港(8)」(2017年08月08日)

このファタヒラなる人物は、別名をファディラ・カーン(Fadhillah Khan)あるいはファラテハン(Falatehan)と称し、スマトラ島北部にあった港市パサイ(Samudera Pasai)の王スルタン・フダ(Sultan Huda)の息子だったという説が有力だ。ポルトガルが1521年にパサイを陥落させたとき、かれは落ち延びてドゥマツへ逃れ、ドゥマツ王家の庇護を得てスルタン・トランゴノの妹ラトゥ・プンバユン(Ratu Pembayun)を妻にし、ドゥマツ軍を率いる将軍となった。ラトゥ・プンバユンは最初、チレボン(Cirebon)のスルタンであるスナン・グヌン・ジャティ・シャリフ・ヒダヤトゥラ(Sunan Gunung Jati Syarif Hidayatullah)の息子パゲラン・ジャヤクラナ(Pangeran Jayakelana)に嫁いでいたが、ジャヤク

ラナが若くして没したため、未亡人になっていた。1524年にかれはさらに、シャリフ・ヒダヤトゥラの娘、ラトゥ・ウルン・アユ(Ratu Wulung Ayu)を娶っている。

最終的にバンテン攻略軍はチレボンとドゥマツの連合軍となり、総大将がチレボンのスルタンの息子シェッ・マウラナ・ハサヌディン(Syekh Maulana Hasanuddin)で、ファタヒラの指揮するドゥマツ軍はそれを補佐する立場に就いた。バンテン攻略戦は1526年に行われ、イスラム軍が港と周辺領土を占領してそこをチレボン王国の領地とした。バンテン王国が設立されてハサヌディンが初代スルタンの位に座するのは、しばらく後

になる。

ファタヒラはその翌年、カラパ進攻を行い、カラパを征服してそこをジャヤカルタと改称し、バンテンの属領と位置付け、自らその地の領主として経営に当たった。ポルトガルが小国であり、人的資源が不足していたことが、ファタヒラに幸いしたようだ。ポルトガルはバンテンよりもカラパに城砦を築く方針を立てていたものの、人手が足りなかったために大した軍勢を駐留させることも、城砦を築くことも延び延びにしていた間にイスラム軍がカラパを奪取してしまったのである。1527年おそくにポルトガル船が城砦建設のためにカラパにやってきたとき、かれらを迎えたのは友好的なスダ人でなく、攻撃態勢のイスラム兵だった。こうしてポルトガルがマラッカに近いジャワ島西部に基地を持つ機会は永遠に失われてしまう。

カラパがジャヤカルタになった日が1527年6月22日であるとの歴史家の説によって、首都ジャカルタの創設記念日がそのように定められている。ジャヤカルタの版図は西のチサダネ川(Sungai Cisadane)と東のチタルム川(Sungai Citarum)にはさまれた領域で、南はボゴール丘陵に接し、北は海岸線にとどまらず、プラウスリブまでがその領地に含まれていた。

ファタヒラは1564年までジャヤカルタを統治したあと、バンテン王国のスルタン・ハサヌディンの女婿トゥバグス・アンケ(Tubagus Angke)に位を譲った。アンケは1596年まで領主を務めてから、息子のウィジャヤ・クラマを後継者にした。

スダ王国がどうなったかと言えば、バンテンとジャヤカルタからひっきりなしに押し出してくるイスラム軍の攻勢にさらされてじわじわと領土を奪われ、遷都しながら抵抗を続けてきたものの、スダ王国最後のマハラジャとなったヌシヤ・ムリヤ(Prabu Nusiya Mulya)のときについに力尽き、1579年に全領土を失ってこのヒンドゥ王朝は崩壊し、西ジャワのイスラム化が完成するのである。

バンテン王国がイスラム化した西ジャワの支配者となった。この歴史の流れを見る限り、同じ西ジャワにあるとはいえ、バンテンと他のスダ地方とは種族的文化的な違いが存在することがわかるだろう。インドネシア共和国独立以来西ジャワ州の中にあつたバンテンが2000年に新州として分離したのは、そのような背景があつたからにちがいない。

[続く]

「バタヴィア港(9)」(2017年08月09日)

バンテン湾からポンタン海岸にかけてのエリアは高温少雨であり、チバンテン川(Sungai Cibanten)も落差が小さいために水流は緩く、水はよどんでいる。水の入手に困難を抱えていたバンテン王国は、そのための大規模な対策を講じてきた。その結果、水田も増加し、また広大なコショウ畑が開かれて国際交易品のコショウが大量に供給されるようになり、バンテン港は一大開港場として繁栄を謳歌するようになる。コショウ供給を増加させるためにバンテン王国はスダ海峡を越えてランブン(Lampung)地方まで攻め込み、ランブンを支配下に置いてコショウをバンテン市場に集めることまでした。

バンテンの発展はマラッカの盛衰に多くを負っている。マラッカがポルトガルに奪われてからというもの、イスラム勢力がマラッカ海峡の通過を避けるようになったため、この南洋地域での交易路はマラッカ海峡か

らスンダ海峡にとって替わられることになった。ジャワ海からスンダ海峡を抜けてインド洋東岸部を通る航路が幹線と化すようになる。スンダ海峡の東口に位置するバンテンにとって、それは願ってもない幸運だった。バンテンのコショウ取引はうなぎのぼりに上昇して行った。

オランダ人がこの南洋にはじめてやってきたのは、ウィジャヤ・クラマがジャヤカルタの領主となった1596年のことだ。

そもそもオランダ人がはるか南洋のジャワ島西部北岸地域にまで航海してきたのは、当時オランダが置かれていた情勢に押し流されてのことだった。そのころオランダ人は支配者であるスペインからの独立をはかって闘争を続けており、スペインはオランダの経済力を弱めようとしてオランダ海運のリスボン入港を禁止した。ポルトガル船が南洋から持ち帰ってくるコショウその他のスパイス類をリスボンからヨーロッパ北部に運搬していたオランダ海運が、その流通ルートの根元をわが手に握ろうと考えるのは当然の成り行きだろう。そうすることによって反対にスペインの経済力が打撃を受ければ、オランダの国家規模でのメリットが増大するのである。

オランダ商業資本が企画した南洋航海で、コルネリス・ド・ハウトマン(Cornelis de Houtman)率いる4隻の船隊がテセル(Texel)港を1595年4月に出帆した。喜望峰を超えてから、一行はポルトガル船を避けるためにマダガスカル島北部からまっすぐスンダ海峡を目指す、大胆でリスクの高い航路を採った。6千キロのインド洋横断行だ。そして砲20門を装備した230トンの新鋭船ホランダディア(Hollandia)号とアムステルダム号、マウリティウス号、ダイフケン(Duyfken)号のオランダ船4隻は1596年6月23日、念願のバンテンに到着したのである。

ハウトマン遠征隊はバンテンで当初穏やかに交易しようとしたが、取引はあまりうまく進まず、荷はそれほど集まらなかった。あせった一行は略奪などの手荒な手段を取り始め、挙句の果てに暴力事件を起こしてバンテン当局に捕らえられ、身代金を支払って釈放されるという事件まで引き起こしている。ところが一説によれば、その暴力沙汰は商品をめぐってのものでなく、バンテン王宮が最新鋭の船を手に入れたいがために一行を毒殺しようとして狡猾な罠をしかけたために、かれらが怒って暴れたのだという話もある。この真偽とは無関係に、バンテンではオランダ人ハウトマンの悪評だけが残った。[続く]

「バタヴィア港(10)」(2017年08月10日)

6カ月近いバンテンでの滞在を切り上げると、ハウトマン船隊は12月13日に東に向かい、ジャヤカルタに入港した。するとシャバンダル(shahbandar 港務長官)がホランダディア号を訪れ、ヨーロッパ人とのコミュニケーション言語となった卑俗化したポルトガル語で告げた。

「バンテンから連絡があり、遺憾ながら、貴殿らの到着を見た住民は家財道具を持って避難した。上陸しても何も無い。」

二人の水夫が町の様子を見るために上陸するのを許された。確かに町中はがらんとして人影がない。

ハウトマン一行はバンテンでの行跡を繰り返すまいと自戒していたから、一行の穏やかな様子を見た住民の中に「オランダ人はバンテンが言うほど悪辣ではなくたいした危険もない」と考える者たちが三々五々家に戻り、食糧をオランダ船に売りに行きはじめた。一行は5日間滞在してから出帆することにした。すると

出港する前に領主と重臣たちが町に戻ってきて、オランダ船を見学したい、と船に乗り込んできた。オランダ人一行を怖がっていた住民も、オランダ人が去るというニュースを聞いて安心し、町に戻って来たから、ハウトマンたちはやっとジャヤカルタの普段の様子を目にすることができた。ジャヤカルタでは、ハウトマン一行の評判は決して悪いものでなかった。

ハウトマン船隊はさらに東ジャワの港を訪れて交易を求めたものの、やはりニュートラルな姿勢での取引はうまく進展せず、結局また略奪が繰り返されている。最後の寄港地となったバリ島では、一行は悪事をはたらかなかったようだ。

このようにして史上初の壮挙となったオランダ船隊の南洋周航は成し遂げられたが、かれらの持ち帰った積荷は決して満足できる量でなかった。コショウ245袋、ナツメグ45トン、メース30バアルといつかれらの収穫のほとんどは略奪で手に入れたものだった。この航海は29万ギルダーの投資で行われ、スパイス・宝石・珍品などの商品を手に入れるために10万ギルダーが費やされ、結果として8万7千ギルダーの利益を生んだ。

船隊は1597年の夏にテセルに帰還したが、戻った船隊はアムステルダム号を欠いた3隻になっており、また故国に帰れた乗組員の数も89人しかいなかった。このオランダ初の南洋航海は、それでも大成功と評価され、オランダに一大投機ブームが巻き起こった。

ハウトマンに続く成功者となったのは、1598年初頭に出発して1599年に帰国したヤコブ・ファン・ネック(Jacob van Neck)の遠征隊で、この遠征隊は400%の利益をあげることができた。ヤコブ・ファン・ネックは三隻の快速船で南洋に先行し、ハウトマンと同じルートを経て6カ月後にバンテンに到着した。そのバックアップとしてウィブランド・ファン・ワールウェイク(Wybrand van Warwyck)率いる5隻の船隊が後続した。この8隻による大遠征を企画したのは旧会社(Oude Compagnie)と呼ばれる商業資本の会社で、1594年に9人のオランダ商人が設立した遠国会社(Compagnie van Verre)と1597年末に設立された新航海会社(Compagnie van de Vaerte)が合併したものだ。

先行した快速船三隻はポルトガルと交戦していたバンテン王国に支援の手を差し伸べたため、バンテン王国側はそれを謝してヤコブ・ファン・ネックに大量のコショウを買うことを許した。この遠征隊が巨大な利益をあげることができたのは、そのような偶然が関わっている。後続の5隻の船隊が到着すると、8隻は二分されて大量のコショウをオランダに運ぶ隊と、マルク地方に向かう隊に別れた。マルクに向かった船隊はテルナーテ(Ternate)に商館を建ててから帰国した。1600年までに8隻のすべてが一隻も欠けることなく帰還できたそうだ。[続く]

「バタヴィア港(11)」(2017年08月11日)

旧会社は1600年までに南洋に向けて遠征隊を、ヤコブ・ファン・ネックのものを含めて四回送り出している。旧会社はイサアク・ル・メール(Isaac Le Maire)が興したブラバント会社(Brabantsche Compagnie)と1600年に合併してアムステルダム東インド会社と名を変え、アムステルダム市当局から東インド貿易の独占権を与えられた。類似の状況はオランダの各港にも波及して、東インド貿易独占権を持つ会社が林立するようになり、各港から続々と遠征隊が南洋に向かって出帆し、スパイス類を持ち帰ってくるようになる。

そのような状況が市場価格を混乱させることになるのは言うまでもあるまい。最終的に行政が介入してそれらの諸会社をひとつにまとめた国策会社「連合東インド会社」(Vereenigde Oostindische Compagnie)が1602年3月に設立された。

つまり、ハウトマンによるオランダ人の南洋初航海が行われたとき、VOC(オランダ東インド会社)はまだ存在していなかったのであり、1602年より前にバンテンやテルナーテで手に入れたオランダ商館建設許可も、オランダ東インド会社に与えられたものではなかったということなのである。だから、イギリス、オランダ、フランスなどの東インド会社設立年だけを比較して、どの国が出遅れたなどという評価を下すのは皮相のかぎりだということが言えそうだ。

ちなみにこのVOCはそれ以前にあった6つの会社が合併したものであり、各会社はVOCの支部として存続し続けた。カーメル(kamer インドネシア語化して kamar となった)と呼ばれたその支部はアムステルダム、エンクハイゼン、ホールン、ロッテルダム、デルフト、ミッデルブルフ別名ゼーラントにあった。取締役会も最初は各カーメル会社の取締役が全員参加したため73人で構成され、定員の60人になるまで自然減耗にまかせられた。

取締役会の上に重役会である十七人会(Heeren XVII)が置かれ、各カーメル会社の出資比率に応じてアムステルダム8人、ゼーラント4人、他のカーメルからひとりずつ、そしてアムステルダム以外のカーメルから輪番でひとり、というメンバー構成になっていた。会議は年三回開かれ、開催地は持ち回り決められたものの、圧倒的に有力なアムステルダムがVOCを牛耳るような形ですべてが回転していたようだ。

東インドには現地での活動と管理のトップオフィスとして総督館が置かれ、VOCの十七人会が総督を指名して派遣した。初代総督は1599年以来ブラバント会社で遠征隊指揮官を務めていたピーテル・ボット(Pieter Both)で、かれは1610年から1614年まで総督の座に就き、マルク経営、ティモール(Timor)征服、ティドーレ(Tidore)からのスペイン勢力排除といった業績をあげた。この初代から三代目までの間、オランダ東インド会社総督館はマルク地方に置かれていた。

VOCは1605年にアンボンとテルナーテからポルトガル勢力を駆逐し、アンボンとテルナーテのポルトガル要塞をビクトリア要塞とオラニエ要塞に変えてオランダの戦力にした。この段階でマルク地方はVOCにとってジャワ島西部北岸地域よりはるかに安定した状況になっており、三人の総督がすべてそこを拠点にしてスパイス生産地の完全支配に向けて手を打っていくことを優先したのも当然の成り行きであったにちがいない。だが十七人会は決してそれだけで満足していたわけではなかった。

十七人会は初代総督に対して、バンテンで得た商権を育てるための安定した基地獲得を任務のひとつに与えていたのだ。マルク地方にその機能を求めるのは、距離的に無理がある。立地条件はジャワ島もしくはスマトラ島だろう。しかしジャワ島内は強力な原住民王国の支配下にあり、疲弊覚悟で大きな戦争をしなければ、基地を設ける土地の獲得は難しいにちがいない。結局この案件は第四代総督のときまで、宿題として持ち越されることになった。[続く]

「バタヴィア港(12)」(2017年08月14日)

続く第二代総督のヘラルド・レイnst(Gerard Reynst)はピーテル・ボットから引き継ぎを受けて総督職

に就いたものの、一年ほどで病に倒れ、現地で死去した。十七人会は急遽、優れた現地の社員ラウレンス・レアル(Laurens Reael)を第三代総督に指名して、指揮系統に穴をあけないように努めた。かれは1616年から1619年まで総督職を務め、十七人会が指名した第四代総督ヤン・ピーテルスゾーン・クーン(Jan Pieterszoon Coen)にその椅子を引き継いだ。

バンテンでの商権確立とビジネス確保は徐々に進められたが、さまざまな難題がそこにまわりついて現地のVOC社員を苦しめた。1602年、ファン・ワールウェイクは再びバンテンに来航して通商許可を得ようとしたが、徒労に終わった。バンテン王宮がかれに与えたのは、商館建設と商館員一名の駐在許可だけだった。1603年にバンテンのオランダ商館が完成し、初代商館長にはフランソワ・ウィテール(François Wittert)が就任した。

イギリス東インド会社がはじめて南洋に送り出した遠征隊はジェームズ・ランカスターが指揮するもので、1601年にイギリスを出帆し、翌年になってからアチェとバンテンを訪れた。イギリス王国の公式使節として女王陛下の親書と献納品を携えてきた一行はバンテン王宮に歓迎され、商館建設の許可が与えられた。

こうしてバンテンの町中にオランダ人とイギリス人が併存し、バンテン王宮のからんだ商品取引が展開されるようになる。最初はオランダ人もイギリス人も紳士的なビジネスを行っていたものの、そのうちに両者の間で商品獲得の競争が激しくなり、両者は互いに相手を蹴落とそうとして抗争があからさまに行われはじめた。両者間の直接的な実力行使だけでなく、バンテンの行政官や支配者層を自分の味方につけて相手と反目させようとしたために状況は悪化の一途をたどり、更には1608年に王家の一族の間で内紛が発生して両派がそれぞれ西洋人を後ろ盾につけようと動いたことから、バンテン王国の国内情勢も険悪化した。

1526年10月8日にスダ王国のバンテン地域がイスラム軍の手に落ちてから、そこはチレボン王国の領地とされ、王家の一族が領主として置かれるカディパテン(Kadipaten)の一つとなった。領主の座に就いたのはマウラナ・ハサヌディンだ。

バンテンがスルタン国として自立するのは1552年のことであり、領主のマウラナ・ハサヌディンが初代スルタンに横滑りした。この初代スルタンは1570年に没したため、息子のマウラナ・ユスフ(Maulana Yusuf)がそのあとを継いだ。マウラナ・ユスフは1585年に没し、まだ幼い王子のマウラナ・ムハンマツ(Maulana Muhammad)が後見者に護られて王位に就く。成人したマウラナ・ムハンマツは既にバンテンに服属しているランプンを越えてパレンバンを伐り従えようと軍を率いて進攻し、その戦の中で1596年に没した。

急遽ふたたび、その王子が王位を継ぐことになる。バンテン王国第4代スルタンとなったのは、まだ生後5カ月のアブドゥル・ムファキルだった。この幼いスルタン・アブドゥル・ムファキル・マフムツ・アブドゥルカディル(Sultan Abdul Mafakhir Mahmud Abdulqadir)は後にスルタンアグン(Sultan Agung)と呼ばれた人物だが、よく似た名前のスルタン・アグン・ティルタヤサ(Sultan Ageng Tirtayasa)とは別人であり、祖父と孫の関係になる。

アブドゥル・ムファキルを後見したのは、行政府の最高責任者であるマンクブミ(Mangkubumi)のジャヤヌガラ(Jayanegara)だった。ところが1602年にジャヤヌガラが死去したため、その弟がマンクブミの職を継いだ。ところが弟は兄ほど高潔でなく、ほどなく不祥事が起こって弟はマンクブミの座から追われる。[続く]

「バタヴィア港(13)」(2017年08月15日)

アブドゥル・ムファキルの母、ニマス・ラトゥ・アユ・ワナギリ(Nyimas Ratu Ayu Wana-giri)が政権に関わりたい一派に担がれて、スルタンの後見者となった。この構図はあらゆる国で頻繁に起こった政権争奪争いの典型パターンだろう。結局1608年からほぼ一年間、バンテン王家の血で血を洗う内紛によって王国内は大いに乱れたのである。

内紛はパゲラン・ジャヤカルタ・ウィジャヤ・クラマの調停で鎮静化し、マウラナ・ユスフの王子のひとり、アリア・ラナマンガラ(Arya Ranamanggala)がマンクブミの位に就いてスルタン・アブドゥル・ムファキルを後見することになった。後に先鋭化していくウィジャヤ・クラマとアリア・ラナマンガラの確執が、ここに端を発する。このふたりはいとこ同士なのだ。

VOCがバンテンに建てた商館は、バンテン王国初代スルタンが設けたスロソワン(Suro-sowan)宮殿へ向かう大通りに沿った町の中心部だった。イギリス東インド会社が派遣したジェームズ・ランカスターの遠征隊もバンテンに駐在員を置き、そのあとを追ってフランスやデンマークなど他のヨーロッパ諸国からも商人がバンテンを訪れるようになって、バンテンのヨーロッパ人コミュニティは百人を超える人口に膨れ上がっていった。その人口のマジョリティを占めたのは、メスティーツと呼ばれるポルトガル人とアジア人の混血者だ。

ポルトガル人がアジアで占領した諸港諸都市を維持するためには、人口の不足がネックになった。だから現地で子供を産ませてキリスト教文化の中で育て上げ、自らをポルトガル人(キリスト教徒としての、もっと広い意味でのヨーロッパ人)と意識する混血者がポルトガルのアジア経営に重要な役割を果たしてきたのである。あるポルトガル軍船の乗組員はすべてメスティーツで、キャプテンだけが純血ポルトガル人というケースはざらにあつたし、もっとあとにはポルトガル要塞の守備隊長以下全員がメスティーツという例も出現している。だからアジアでは、ポルトガルの世紀にヨーロッパ人とのコミュニケーション言語としてメスティーツが使う卑俗化したポルトガル語が普及したのだった。

ポルトガルの世紀が幕を閉じたのは、後を追ってアジアに進出してきたオランダ人、そしてイギリス人によるものだ。オランダ人は最初、ポルトガルの勢力を避けながら南洋に進出し、態勢を整えてからポルトガル人の追い落としにかかった。そしてポルトガル人と同じようにアジアの諸港諸都市をネットワークで結んだが、ポルトガル人のように人手不足に苦しめられることがあまりなかった。なぜなら、ポルトガル人から奪った諸港諸都市は既にメスティーツによって動いていたのであり、オランダ人はその体制の上に乗っかる形で支配者の交代をしたから、ポルトガルの旗がオランダの旗に替わっただけで、メスティーツたちは従来の暮らしにたいした混乱や転変を被らず、安全で平穏な生活を続けることができたということらしい。ヤン・ピーテルスゾーン・クーンが興したバタヴィアの街は最初、住民人口があまりにも乏しかったために、アジアの各地からメスティーツを連れてきて街の人口充実を図った。ところがそのうちにメスティーツよりはるかに勤労意欲の高い人種が存在することに気付いた。中国人だ。それ以来、バタヴィアの都市建設方針が一変するのである。

だからヨーロッパ各国の商人がバンテンでの物産取引の手伝いをさせるために雇ったメスティーツがメインを占めることになったわけだ。それ以外にも、バンテンのヨーロッパ人コミュニティに属す非原住民の中には、イギリス人に雇われたロシア人、アフリカから連れてこられた黒人奴隷、平戸で集められた日本人傭

兵などが混じっており、またヨーロッパ人コミュニティに属さない非原住民として、はるか以前から住み着いていた中国人やアラブ人などもいた。その中に、ポルトガル人商人すら混じっていたのは、個人として活動する人間が国籍を問わずに受け入れられていたことを示す実例だろう。[続く]

「バタヴィア港(14)」(2017年08月16日)

バンテンの市街に隣接する東側のエリアは数百軒の家屋が無秩序に建てられたスラムになっていて、ヨーロッパ人来航以前からこの地に流れ込んできた中国人を主体とする非原住民居留地区になっていた。中国人がメインを占めたためにプチナン(Pecinan)と呼ばれて中国人居留区と認識されていたが、非中国人も混じっている。ヨーロッパ人や他の非原住民はプチナンに住むよう命じられ、そこに家を借りたり、建てたりして住んだが、スラムの名が示す通り住環境としては劣悪で、ヨーロッパ人はその環境を「悪臭を放つシチュー」とあだ名した。

そのプチナンの中で、種々の民族が自己の儲けを追求し、邪魔になる他者を押し除けようとして争った。特にオランダ人とイギリス人の対立抗争は激しいものがあり、ただでさえ陰悪な空気の中で暴力行為や悪事が頻発した。バンテン当局に敵を誹謗中傷する訴えを起こして打撃を与えようとするのは日常茶飯事で、さらに原住民や中国人をそそのかして悪事を働かせ、敵に損害を与えようとする事も行われた。

オランダ人はあるとき、イギリス人が商品を蓄えている倉庫の隣に住んでいる中国人をそそのかし、地下道を掘らせて倉庫を爆破し、商品を略奪させようとしたが、その企ては未遂に終わった。一方、イギリス人はエリザベス女王即位記念日に総出で路上に出て酔っ払い、通りかかったオランダ人にしつこくからんで怒らせ、相手が手を出したら大勢でリンチするという事を行った。原住民の子供にオランダ語の悪口を教え、「オランダ人に会ったらこう言え」とけしかけるようなこともした。そんなあれやこれやが積み重なって、オランダ人とイギリス人が路上で出会えばまず確実に一波乱あるという状況に至ったのである。

バンテン王宮はスロソワン宮殿の城壁を強化し、警備兵の武力を高めて、治安と防衛力の維持をはかった。ヨーロッパ人が通商を行うのはバンテンにとって有益なことだが、居留者の中に勢力を強める者が出るのは王国にとって有害である。ヨーロッパ人はさまざまな理由をつけて石造りの建物や倉庫の建設許可を願い出たが、王宮は堅固な建造物が作られるのを常に禁止し、木造平屋建てのものしか許さなかった。ヨーロッパ人はそんな条件下に、建造物をできるかぎり頑丈なものにするよう努めた。

ヨーロッパ人同士の抗争は領内の治安に問題ではあるが、ヨーロッパ人の存在は通商面で王国に大きな利益をもたらしている。そのアンビヴァレンツは当局者をして、抗争への介入を熱心に行わない方向へと向かわせた。かれらが団結してバンテン王国に弓を弾くよりも、互いにつぶしあいを見せておくほうが、王国にとってははるかに安全なのである。ヨーロッパ人の酔っ払いや盗み、役人への横柄な態度、モラルに欠けるふるまいなどに対して、王国当局者は容赦しなかった。ヨーロッパ人への風当たりは他人種よりも特別きつかったらしい。だからヨーロッパ人商人や駐在員にとって、バンテンでの暮らしは居心地の悪いものだったし、おまけにさまざまな熱帯病が簡単にかれらを墓穴の中に引きずり込んだ。

オランダ人にしてみれば、好きこのんでそんな状況下に置かれているわけではない。バンテンにいる限り、イギリス人とのすさんだ抗争の毎日であり、駐在する商館員たちはバンテン当局に睨まれて委縮した日

常生活を送らざるを得ず、おまけに王宮からはさまざまな取引上の制約が課される。もっと自由で落ち着いた暮らしのできる場所、自由に動けてフェアな取引のできる場所に移りたいとかれらが思うようになるのも、自然の成り行きだ。そこにジャヤカルタの存在がクローズアップされてくるのである。[続く]

「バタヴィア港(15)」(2017年08月18日)

バンテン王国の内紛に関わろうとしたオランダ人とイギリス人に、アリヤ・ラナマンガラは強い危惧と反感を抱いた。とはいえ、コジョウの有力バイヤーの一端であるかれらはバンテンにとってのメリットも抱えている。ラナマンガラはかれらを冷遇しようと努めた。

オランダ人もイギリス人もスルタンの後見人ラナマンガラの歓心を買おうと努めたが、オランダ人はその一方でひそかにパゲラン・ジャヤカルタへのアプローチを強めて行った。ラナマンガラの姿勢が変わらなければ、ジャヤカルタに買付場所を移すだけのことだ。相互に敵対心を持ち、疑心暗鬼に陥っているバンテンとジャヤカルタを手玉に取ろうという作戦をオランダ人は開始した。

バンテンのVOC商館はパゲラン・ジャヤカルタとの折衝を根気よく続けた末に、1610年11月ついにジャヤカルタに住居と商館あるいは取引所を建設する許可を得た。バンテンの商館長ジャック・レルミト(Jacques L'Hermite)はチリウン川河口東岸に縦横それぞれ50尋の土地を当時の相場の50倍の価格でウィジャヤ・クラマから買い取り、そこに商館を建てた。ジャヤカルタの町にもスラム状のプチナンが川を越えた東側にある。商館建設用地はそのプチナンの北側だった。ウィジャヤ・クラマが与えた商館建設許可の内容がそうになっていたことは言うまでもあるまい。オランダ人に選択の余地は与えられなかった。

建設用地は常に水をかぶっている湿地帯であり、沼地での基礎工事はたいへん手間取った。カプテン・ワッティング(Kapten Watting)が初代ジャヤカルタ駐在員を命じられ、かれはそこから近い場所に家を借りて住み、工事の進捗をはかったものの、資金・資材・人手・そして建築知識と専門能力のすべてが不足しており、建設プロジェクトは遅々としてはかどらなかつたが、それでも少しずつ建造物は形を取り始めた。石と漆喰も使われたが不足分は木や竹あるいはわらで補われたみすぼらしいものになった。その一方で、川に沿って50歩ほど一直線に伸びた堅固な石造りの城壁が、建物とはまるでそぐわない姿を示していた。それは50尋の土地を十八歩オーバーして、プチナン側に食い込んでいる。

1611年に完成したナッソーハイスはオランダ人の宿舎兼取引所として稼働を始めた。VOCはナッソーハイスで行われる取引がジャヤカルタの徴税を免れるものだと主張した。自己所有の土地内で行う売買に市域を統括する行政の徴税権は及ばないとVOC駐在員は言い張った。だが原住民側の慣習では、領地内のすべての土地は領主の所有に帰することになっており、土地使用の権利はその用途と納税をもってはじめて認められるのである。

役人はまた、城壁が用地の外まで伸びていることを問題にしたが、それはパゲラン・ジャヤカルタの同意を得ていることだ、と駐在員は空とぼけた。ヨーロッパ人たちがプリンスジャコトラ(Prins van Jacatra)と呼んでいるパゲラン・ジャヤカルタは役人の報告を聞いて腹を立てた。かれは役人に事実を語ってオランダ人の横暴を取り締まるよう命じたものの、オランダ人の態度を見る限り一戦交えなければ事は終わらない、と語る役人にそれ以上命令することができなくなった。通商を盛んにして経済を勃興させ、バンテンと肩を並

べる港市に育て上げるために呼び込んだヨーロッパ人を、取引の実績もあがらないうちにまた追い出すのでは、何をしていることやら解らなくなる。ウィジャヤ・クラマはリスクを抱えることを決意し、王宮の警護を増強し、またチリウン河口西岸に大きな税関倉庫を作らせた。倉庫が作られた場所は Paep Jan の土地と呼ばれ、後に税関を意味するインドネシア語 Pabean の語源になったという話だ。

そのジャカトラという言葉は日本人の耳に「ジャガタラ」と聞こえたようだ。そのため、南洋に関する知識が増加し始めた当時の日本人は、ルソンのずっと向こうにある大きな島のことをジャガタラと呼ぶようになった。ジャガタラからやってくる紅毛人は南蛮人であり、かれらが主食にしている芋はジャガタラ芋、略してジャガイモと呼ばれるようになったそうだ。だがそのジャガイモが南米の原産であり、スペイン人がヨーロッパに広めたものをオランダ人が南洋に持ち込んできたという歴史にまでは知識が及ばなかったようだ。

[続く]

「バタヴィア港(16)」(2017年08月21日)

オランダ人はまた、プリンスジャカトラにはまったく無断で、ジャヤカルタの海岸から4キロほど沖に浮かぶオンルスト(Onrust)とカイパー(Kuyper)の島々に基地を設けた。それは小規模な海軍基地であり、船舶修理所・兵舎・倉庫・教会・病院などの施設がそこに立ち並んだ。

パゲラン・ジャヤカルタ・ウィジャヤ・クラマがバンテンに対抗してオランダ人の商館建設を認めたことが、ラナマンガラに怒りの火を燃えたたせたことは疑いがない。本家であるバンテンに一言の相談もなく僭越なふるまいをするとは、何たる思い上がりだろうか！ジャヤカルタをウィジャヤ・クラマの手にゆだねておけば、とんでもないことになりかねない。パゲラン・ジャヤカルタを廃してあの属領をバンテン行政機構の直属に移行させることをラナマンガラは考えるようになった。

しかしウィジャヤ・クラマも決して愚者ではない。オランダ商館は吹けば倒れるように貧相なものにしておかなければならないのだ。頑丈な建物を造らせ、そこに大砲などを置かれたら、商館は要塞に一変する。絶対にそうさせてはならない。そんな方針でオランダ人に向かおうとしたにも関わらず、かれとオランダ人との力関係は結局逆転してしまう。プリンスの善性がオランダ人の狡猾さに呑み込まれてしまったのかもしれない。

1615年になってイギリス人の南洋政策が積極化し、イギリス東インド会社はクリストファー・プリン(Christopher Pring)に5隻の軍船を指揮させて南洋に向かわせた。1618年にバンテンに到着したプリン船隊は、オランダ人を威嚇するべく示威行動を行う。VOCはそのとき、それに対抗する戦力をジャワ島西部北岸地域に持っていなかった。このままイギリス人と抗争を続けていけば、自滅してしまうのが明白だ。

バンテンでの取引が停滞を続けているのに反して、ジャヤカルタのVOC商館は徐々に取引量が増加していたから、オランダ人はバンテンをイギリス人に明け渡す方針を選んだ。

バンテンのオランダ商館にある人員と貨物の主力は海路ジャヤカルタのナツソーハイスに移され、ヤン・ピーテルスゾーン・クーンもジャヤカルタに移ってVOCの本拠地となる基地の建設に取り掛かる。ナツソーハイスは全面石造りの堅固な建物に改造され、さらに川岸に沿ってもうひとつの建物マウリティウスハイス

が建てられて、ふたつの石造りの建物がL字形をなすように配置された。頑丈な石の城壁がふたつの建物をつなぎ、城壁の上には数門の大砲が川に向けて並べられ、警備兵も25人から50人に増やされて新式銃を持たされた。オランダ商館は要塞に姿を変えたのである。これが第一期カスティルだ。

加えて、要塞に接近しすぎている住民家屋は襲撃してくる敵に利用されるため、要塞の周囲をある程度の距離までクリアーにすることも強行された。つまり武装オランダ兵が住民家屋を強引に取り壊して空き地に変えたのである。通商をしにやってきたはずのオランダ人が一転して完全武装集団に変化したことにウィジャヤ・クラマは仰天したにちがいない。恐れていた事態が現実になりつつある。だが続いて、かれの不安をやわらげる方向へと事態は変化して行った。

イギリス人がオランダ人を追ってジャヤカルタまでやってきたのである。1618年9月、プリンはウィジャヤ・クラマを訪問して協定を結ぶことに成功した。毎年7百リアルを支払うことで取引の免税特権をもらい、またイギリス商館を建てるためにパベアンと王宮の間にある土地を1千5百リアルで手に入れた。そこはクーンが改造したカスティルと川をはさんで対峙する場所だった。商館建設のためにイギリス人駐在員がやってきて、工事の指揮を執る。その駐在員は王宮の軍事顧問も兼ね、ジャヤカルタ軍の武装は目覚ましく向上した。[続く]

「バタヴィア港(17)」(2017年08月22日)

ウィジャヤ・クラマがオランダ人を追い落とそうとしているイギリス人に深く傾倒したのは、オランダ人が突然武威をむき出して脅威をまき散らすようになったことや狡猾なオランダ人への憎しみもあったのだろうが、それ以上にかれの眼前で展開された武力の差異に駆られた面が強かったにちがいない。VOCの戦力は総督館のあるマルク地方を根拠地にしていたため、西ジャワ北岸部には手薄な戦力しかかなかつた。それに対する圧倒的なイギリス人の戦力を目の当たりにしたウィジャヤ・クラマは、オランダ人は撃滅される運命にある、と考えた。今ここで両者が正面衝突すれば、オランダ側に勝ち目のないのは明らかだ。

それに加えて1618年11月、イギリス東インド会社が南洋に派遣したトーマス・デイル(Thomas Dale)率いる6隻の船隊がバンテンの沖合に姿を現したのである。先に来ていたプリンの船隊と合流したデイル船隊は、南洋の商圏を手中に納めようとしてアグレッシブさを増し始めたVOCの目論見をここで粉碎しようとする挙に出た。オランダ人がバンテンを去っても、ジャヤカルタを征服してそこに強固な基地を作るのであればイギリスの権益への障害になるのは明白である。ジャヤカルタをオランダ人奪わせないのだ。だからこそプリンは執拗にオランダ人を追い続けていたのだ。

イギリスの海上部隊はバンテンとジャヤカルタの沖に散開して、オランダ船の入出港を封鎖する構えに出た。折しも、日本・中国・シヤムからの総額8万リングットに値する貨物を積んでパタニからバンテンへ戻って来たオランダ商船デスワルテレウオ(de zwarte leeuw)号が、そのような状況の変化をつゆ知らず、待ち受けていたイギリス軍船に拿捕されてしまった。乗組員は全員捕らえられて船内に拘留され、船はイギリス人による監視下に置かれたが、突然猛火が船体を包んで捕虜も積荷も灰になってしまった。

伝書使が慌ただしくジャヤカルタとバンテンを往復し、事件に関する報告がクーンのもとに次々と届けら

れた。事実は、酔ったイギリス人水夫が船倉から酒を持ち出そうとして、誤って持っていた灯りを落としてしまい、こぼれていた酒に引火して大火災となり、オランダ人ばかりか監視に当たっていたイギリス人にも犠牲者が出たのだが、その内容が判明したのはずっと後のことであり、クーンはその事件を別の角度から解釈した。オランダの海軍力は総力を傾けてイギリスにぶつかっていかなければならない。劣勢に押されて縮こまっていたは、ジリ貧が待ち構えているだけだ。VOCの未来に輝きは消え去ってしまう。

クーンは敵味方の戦力を比較した。イギリス人は15隻の船と2千5百人の兵力でオランダ人を叩き潰そうと意気込んでいる。言うまでもなく、それは第一線に投入された臨戦態勢の大部隊なのだ。一方、クーン側の手持ちはオンルストで修理中もしくは修理待ちの7隻の小型船がすべてであり、兵員は150名しかいなかった。負傷兵・商人・日本人傭兵・ポルトガル人協力者そして中国人や原住民の使用人までかり集めて銃を持たせても、戦闘力は250名ほどにしかならない。残るカスティルの住民は、奴隷と解放奴隷ならびに中国人とメスティーソの婦女子4百人だった。

銃と大砲は豊富にあるが、火薬は40樽、砲弾は3百発しかなかった。食糧は入手が制限されていたため、ストックはあまりない。飲料水は川からの流れを引き込んでいたが、川の水を妨害されたらそれまでだ。皮肉なことに、商品や貴金属・宝石・珍品は倉庫にあふれんばかりだった。

クーンは十七人会への報告書を作り、この緊急事態に対処するための軍備と物資の補給を強く要請する文章を書き込んでアムステルダムに向けて送らせたが、報告書が無事にアムステルダムに届いたとして十七人会がそれを読むのは6カ月先になる。そんなことをあてにするクーンではなかった。[続く]

「バタヴィア港(18)」(2017年08月23日)

バンテンのマンクブミ、アリア・ラナマンガラはジャヤカルタでの状況を注意深く見守っていた。状況把握をより深めるために、かれは現地の状況を実地に見聞させようと考えて、弟のひとりパゲラン・ガバン(Pangeran Gabang)をジャヤカルタに出向させた。ガバンは3百人の従者や子供らを伴って海路ジャヤカルタを訪れ、町の外で狩りを楽しんだ。あたかもそれがジャヤカルタへ来た主目的であるかのように。

そしてそのあと、オランダ人がファーダー・スミツ(Vader Smit)と呼んでいる少し離れた島にクーンを呼び出した。そのときの会見の内容はまったく記録に残されていない。このファーダー・スミツ島はタンジュンプリオットの海岸から近いところにあった砂島で、日本軍政期に砂が取りつくされたために海中に沈んでしまったそうだ。

数日後、パゲラン・ガバンは1隻の船に百人ばかりの武装兵を乗せて、チリウン川に乗り入れた。対峙するイギリスとオランダの基地の間を抜けてウィジャヤ・クラマの王宮へ着くと、ウィジャヤ・クラマに会うために下船した。ウィジャヤ・クラマはこのいとこの来訪の真意をはかりかねたが、歓迎を示した。王宮でしばらく過ごしてから、パゲラン・ガバンは次にオランダの要塞カスティルを訪れた。クーンもかれを歓迎し、カスティル内を案内して要塞の構造や配置されている兵力をざっくりと説明した。

バンテンからの客人一行がジャヤカルタを去ると、張り詰めていた緊張がすこしやわらいだ。ウィジャヤ・クラマはクーンにカスティルを移転させるよう提案したが、クーンにそんな気は微塵もなかった。高さ19フィート、幅7フィート、長さ120フィートの堅固な城壁が完成しつつあったからだ。カスティルを攻撃から守るた

めに大量の石を使ったその城壁が完成すると、城壁の上には大型砲40門と無数の小型砲が設置された。

ウィジャヤ・クラマは領民に対して、オランダ人に建築資材や労働力を提供することを禁じていたが、オランダ人は予想外の速さでその仕事を成し遂げてしまった。ウィジャヤ・クラマは無許可でオランダ人が作ったその城壁を非難し、撤去を命じる文書をクーンに送った。クーンの返書には、マタラム王国がジャヤカルタに進攻してきたときに、この城壁がジャヤカルタを護り切るであろうという言葉が記されていた。城壁問題はそこで終わってしまったようだ。

ジャヤカルタで小康状態が続いているとき、ジュパラのVOC倉庫をマタラム軍が攻撃し、2千リングットの商品が奪われ、ヨーロッパ人が3人死亡し、3人が負傷し、17人が捕らえられて身代金が要求された。クーンは即座に兵員150名をジュパラに送って報復した。オランダ人の破壊と略奪の嵐がジュパラの町を荒れ狂い、またその途中の町々でも同じことが繰り返された。その示威的軍事行動が、マタラム王国だけでなく広くジャワ島内にも威嚇効果をもたらすだろうことを、クーンは計算済みだった。

それは、戦力的に窮地に置かれているクーンにとって、危険この上ない賭けだった。たとえ短期間であっても、カスティルの戦力を割くのは大きな冒険であり、たとえその作戦が奇襲であったとしても、150名のすべてが無傷で帰還するのは、よほどの幸運でなければ考えにくいことだ。

その間、カスティルには正規兵がひとりもいなくなる。そのときに重装備の大軍が攻め込んでくれば、オランダ人が築いてきた足場は消滅するかもしれない。しかしクーンはその大きい賭けに手持ちのすべてを張った。

幸いにも、攻撃部隊は短期間で帰還してきた。カスティルの兵力は維持された。おまけに、ウィジャヤ・クラマもイギリス人も、その奇襲部隊の出撃にまったく気付いていなかったのだ。こうして最悪の事態は回避されたとはいえ、オランダ側の軍事力が弱体であることは変わりなかった。[続く]

「バタヴィア港(19)」(2017年09月04日)

ウィジャヤ・クラマはついに数千人の領民に武装を命じた。戦時警戒態勢に入ったのだ。王宮と町の警備は嚴重さを増し、チリウン川の王宮へのアクセスルートにはオランダ人がボーム(boom)と呼ぶ障害物が置かれた。オランダ語のボームとは木を意味する言葉で、その名の通り巨大な丸太が川の流れと直角になるように置かれ、木をどかせないかぎり船は前に進めなくなる。船から入港税や通行税を徴収する場所でこのボームは不可欠な設備だった。インドネシアでは水に関連する場所で Boom という単語を持つ地名があちこちに見つかる。

ウィジャヤ・クラマの軍事顧問となったイギリス人は熱心にその仕事を手伝った。その一方で、イギリス人自身もカスティル対岸に設けたイギリス商館兼倉庫の完成を急いでいた。そこには真鍮製の大型砲を備えた陣地が同時に構築されつつあったのである。

属領のジャヤカルタで進展している波乱を未然に防ぐのはバンテンが当然行うべきことがらであるという常識に反して、アリア・ラナマンガラはいかにその状況を利用して自分の計画を実現させるかということを考えていた。ジャヤカルタ領主であるいとこのふるまいにはもううんざりしていたし、ウィジャヤ・クラマの地位を

保ってやる気もなくなっていた。かれの気がかりは、畏怖すべき悪鬼の具現としか思えないクーンの去就であり、そしてマタラム王国の拡張主義だった。東部・中部ジャワに覇権を確立したスルタン国マタラムは西ジャワ地方を支配下に置いてジャワ島の統一をはかるべく、スダ地方を虎視眈々と狙っているのだ。

カスティルにいるクーンは参事会の同意を得た上で次の行動に移った。1618年12月23日朝、オランダ側は川を隔てたイギリス陣地に使者を派遣して、陣地の構築と臨戦態勢の即時中断を要求した。するとイギリス人は、「これはプリンスジャコトラに命じられて行っていることであり、われわれの独断でやめることはできない。」と返事した。

その日夕方、オランダ兵の部隊はカスティルから出てくると川を渡り、イギリス側の陣地を攻撃した。さらに商館と倉庫に矛先を向け、破壊と略奪を行い、建物に火をかけて灰にした。イギリス人はその攻撃を持ちこたえることができず、ウイジャヤ・クラマの王宮へ逃げ込んだ。

一夜明けた24日、王宮の大砲がうなりはじめた。砲手がイギリス人だろうことは、機敏な発砲と正確な弾着から容易に想像できた。オランダ人もそれにこたえて、カスティルの大砲が王宮に向かって砲弾を吐き出した。夜になっても砲撃の応酬が続き、オランダ側はたいした戦果も上がらないまま火薬備蓄量の4分の1を消費してしまった。その日の砲撃戦でカスティル側はオランダ兵3名その他12名が死亡し、10人の重傷者が出た。

翌25日、ひとりの中尉と兵士7名がカスティルの外へ出撃した。かれらは中国人やジャヤカルタ領民の居住区へ攻め込んだが、敵に取り囲まれて倒され、首をはねられてしまった。乏しいカスティルの兵力がさらに減ってしまったのである。

クーンは緊急参事会を招集した。情勢は絶望的だった。この戦いに現状の兵力で勝利することは考えられなかった。救いは、ウイジャヤ・クラマがまだ水路を完全封鎖しておらず、またイギリス船隊がジャヤカルタに集結していなかったことだ。カスティルを捨てて、とりあえず安全圏に避難するのなら、今がチャンスだ。速やかに人員・兵器・商品を船に積み込んで逃走しようというのが大半の意見だったが、クーンはその案に同意しなかった。

持てる戦力をカスティルに集中させるため、クーンは周辺海域にいるオランダ船をすべてカスティルへ呼び集めさせた。[続く]

バタヴィア港(20) (2017年09月05日)

参事会は、ジャヤカルタ・イギリス・バンテンのどれか一者と同盟を結んで他の二者と対峙しようということ、まじめに討議しはじめた。相手にするなら、やはりアジア人よりもイギリス人だろう。しかしオランダ人の利益をアジア人から守るためにイギリス人がオランダ人に味方するなどという期待は、救いがたい現状認識の誤りだ。なぜなら、オランダ人がこれまで自力で獲得してきた権益をかすめ取ろうとしてイギリス人が世界中で動いている事実が忘れ去られているのではないか。ジャヤカルタでオランダ人が窮地に追い込まれたのも、イギリス人のその方針が原因をなしているのだ。だから現状打破のためにそんなイギリス人に助けを求めるのが祖国と同胞への裏切りとなるのは明白ではないか。

カスティルを無傷で明け渡すのを代償にして降伏の条件を検討したが、結局何の結論も議決されなか

った。

12月30日、11隻のイギリス船隊がついにチリウン河口に集結した。総砲数3百門、兵員1千5百名という戦力は、カスティルに対して2倍の火力、10倍の兵力だった。総司令官トーマス・デイルはラップ手と口上人が乗った小舟をチリウン川に入れさせ、オランダ人に対して降伏勧告、ジャヤカルタ市民には協力を呼び掛けた。

クーンと参事会はVOC現地駐在高位者12名のカスティル脱出を決定した。VOC商務員のピーテル・ファン・デン・ブルッケ(Pieter van den Broecke)がカスティル守備隊長に任命され、日本とペルシャで有能さを示した経験豊富な兵士が副隊長としてかれを補佐した。

もしも最悪の事態に立ち至ったなら、イギリス側に投降してオランダ人の生命保護を優先すること、ただしカスティルと兵器や商品などすべての資産には火を放って、決して誰の手にも渡してはならない。留守を預けた責任者にクーンはそう厳命した。このピーテル・ファン・デン・ブルッケは後にクーンからアンボンのバンダ諸島の経営を託され、現地でのスパイス独占にまい進することになる人物だ。

クーンら上層部はその夜、オンルストから呼んであった小型船に乗り込むと、夜陰に乗じて海上へ脱出した。そして数日間、沖に停泊したまま、カスティルとジャヤカルタの情勢を見守った。

1619年1月3日、大型オランダ商船が一隻、ジャヤカルタに接近してきた。クーンはスマトラから荷を積んで戻って来たその船に合流するよう命じた。ところがそのうち、水平線上にイギリス船隊が出現すると、砲撃しながら接近してきたではないか。こうなればオランダ船隊は逃げるしかない。4時間の追撃戦は日没とともに終わった。クーンはそのままマルクへ向かうことを決めた。

かれは小型船一隻をカスティルに置くことにし、ブルッケへの厳命を再確認する手紙を持たせてジャヤカルタへ向かわせた。またフリゲート船一隻をスンダ海峡に向かわせ、海峡を遊弋して見つけたオランダ船にはジャヤカルタを避けるよう連絡する任務を与えた。別のフリゲート船一隻には、早急にアムステルダムへ直航して、事の次第を十七人会に報告するよう命じた。

こうしてオランダ船隊は別方向へ散る数隻を残して、一路東方に向けて進路を取った。クーンはカスティルとそこに依拠する3百人の住人を運命の手に引き渡してしまったのだ。

いやそれはクーンの目から見ての話しであって、カスティル守備隊のみんながそんな風に状況を見ていたわけでもあるまい。クーンがいかに有能な統率者であったかということに異論をさしはさむ者はいないだろうが、自分がいなくなると部下はなすすべもなく自滅していけだろうとクーンが部下を見ていたかどうかの問題なのである。これは自立と依存という文化問題であり、人間の社会的ビヘイビアにおいてそのどちらを善とする価値観で社会が営まれているのがポイントになっているはずだ。[続く]

「バタヴィア港(21)」(2017年09月06日)

ともあれ、クーンが去ったあとのカスティルに残されたのはオランダ人兵士85人、VOC職員65人、スンダ人10人、日本人傭兵25人、中国人16人、婦人20～30人、子供70～80人で婦女子はほとんどがメステイーンだった。

カスティルはジャヤカルタ兵と上陸したイギリス軍に完全に包囲され、攻撃が行われるたびにカスティル守備隊は絶望的になり、どちらに降伏するかを決めるために交渉が行われた。攻撃側が共同で総攻撃をかければカスティルは問答無用で陥落したはずなのに、両者の思惑が完璧に一致しなかったために、カスティルは生き延びることができたのである。両者は個々にカスティルの降伏申し出を拒絶せず、交渉の座に就いたことから、申し出がなされなかった側はそのときに攻撃を中止しなければならなくなった。

ウィジャヤ・クラマもデイルも自分がボバを引く気はなかったから、損害が大きくなるであろうカスティルへの正面攻撃を相手にさせようと互いに考えていた。「どうせオランダ人は最終的に自分のほうから降伏してくるにちがいないのだから、できるだけ損害を小さくして機が熟すのを待っていればよいのだ。力づくでオランダ人を下そうと言うのなら、かれがそれをすればよい。」

イギリス人は、同じヨーロッパ人である自分の側にカスティルは降伏してくるだろう、と高をくくっていた。ウィジャヤ・クラマもその可能性が高いことを予見していたが、たとえそうだったとしても、お人よしのイギリス人はオランダ人よりはるかにあしらいやすいと考えていた。おまけにここはわたしの領地なのだ。

カスティルのオランダ人は、最初から絶望的な状況に身を置いたため、むしろ少しでも希望の灯が見えるたびに勇気を奮い起こした。絶望に駆られて命を無駄に捨てるようなことはしなかった。利用できるものは何でも利用し、それで思わぬ効果をあげたものもある。敵の攻撃を受けているさなかに「クーンが戻ってきてお前たちに復讐するぞ。」と叫ぶと、攻撃の矛先が鈍ったこともあった。

1月14日、ジャヤカルタ兵の激しい攻撃にオランダ人は、降伏するから攻撃は中止してくれ、と申し出た。ウィジャヤ・クラマはあっさり攻撃中止を命じた。オランダ人がカスティルを破壊して退去すると申し出たところ、クーンが戻るまでカスティルにいてよい、とウィジャヤ・クラマは譲歩した。しかしその代償として、賠償金6千リングットと1千リングット相当の財宝を差し出すよう要求した。ブルッケはその要求を呑み、賠償金等をそろえて降伏文書にサインするため、後日王宮を訪れることを約束し、その日の交渉は終わった。

1月23日、ブルッケはカスティルの外科医J デ ハアン(J. de Haan)と兵士5名、およびスダ人使用人ひとりを従えて、要求されたものをウィジャヤ・クラマの王宮に持参した。ところが王宮の衛兵は一行を捕らえて鎖でしばり、広間へ引き立てた。広間の玉座にはウィジャヤ・クラマとデイルが隣り合って座っており、辱めを受けている一行に宣言した。「お前たちは人質だ。」

ほどなくカスティルにその知らせが届いた。オランダ人はその卑怯なしうちを口を極めて罵ったが、どうすることもできない。仕方なく、身代金として2千リングットを支払うから人質を返してくれと申し出た。ウィジャヤ・クラマはその申し出を蹴った。デイルがウィジャヤ・クラマに、「2千リングットをやるから、オランダ人の言うことは聞くな。」と唆したらしい。

守備隊長ブルッケが捕らわれてしまったため、ピーテル・ファン・ライ(Pieter van Raeij)が隊長代理を務めることになった。数日後、ブルッケはさらに酷い辱めを受けることになる。[続く]

「バタヴィア港(22)」(2017年09月07日)

数日後、川を隔ててカスティルの向かいにあるイギリス陣地跡の防壁の上で、ひとりのオランダ人が手足を鎖で縛られ、首に絞首刑のロープを巻かれた姿で、イギリス兵に引立てられながら行ったり来たりしているのが、カスティルからはっきり見えた。カスティルの中が騒がしくなった。

「あれはブルッケ隊長だ。」

「まるで、これから死刑にされるみたいじゃないか。」

カスティルから非難の叫び声があがった。

しかし、それは単にオランダ人を威嚇するためのデモンストレーションでしかなく、ブルッケ死刑の場の一幕は演じられなかった。ともあれそんな形で戦闘が停止されている間に、オランダ人は先の攻撃で破損した城壁の修理を一生懸命行っていた。

イギリス人はデイルの手紙を密書にしてカスティルに送って来た。中を開くと、イギリス側に投降せよ、という勧告だ。イギリスに降伏するなら、イギリス船で希望する場所まで送り届けよう。持参する個人資産はひとりあたり6千2百リンギットまで認める。もしイギリス船で働きたいなら、仕事と高額給料を保証する。その条件に賛同するなら、オランダ人は非武装でカスティルから退去し、カスティルをイギリス人に明け渡せ。カスティル内にある兵器と弾薬はすべてイギリス側に引き渡し、財貨と商品はプリンスジャカトラをうまく抑えるために使わせてもらう。現地人使用人の裏切りを警戒せよ、といったことが書かれてあった。それからは、矢文による対話が双方の間で続けられた。

2月1日、イギリス、ジャヤカルタ、オランダの三者間で降伏文書の調印が正式に行われた。ところがその翌日、事態は急転したのである。

2月2日、2千人のバンテン兵がジャヤカルタへ進軍してきたのだ。バンテン軍はジャヤカルタの市中を制圧し、パゲラン・ジャヤカルタの王宮をも占拠して、ジャヤカルタを戒厳令下においた。三者間の降伏合意に関わった勢力の中で、その事態の転変に驚かなかった者はいない。

アリア・ラナマンガラは三者間で行われたオランダ降伏の合意を認めなかった。かれはバンテン王国第4代スルタンを通してジャヤカルタ制圧軍指揮官に、オランダ降伏によって発生するジャヤカルタでのさまざまな処理が行われないようにすること、パゲラン・ジャヤカルタを王宮から放逐すること、イギリス人にはバンテン王宮の許可なしに勝手なふるまいをさせないこと、などを実行するよう命じていた。

ジャヤカルタに進駐したバンテン軍は王宮を占拠して、ウィジャヤ・クラマとその側近たちを町の外のジャングルに追放した。そして町を制圧し、川にボームを置き、イギリス人に自粛を命じた。ジャヤカルタの宗主であるバンテン王国は、属領の領主が承諾なしに勝手に結んだ協定が無効であることをかれら三者に見せつけたのである。

パゲラン・ジャヤカルタの墓所がプロガドン(Pulogadung)工業団地に近いジャティヌガラカウム(Jatinegara Kaum)にある。ただし一説によれば、バンテン軍の進攻でジャヤカルタが制圧されたとき、ウィジャヤ・クラマ

はバンテンに連れ戻され、しばらくしてからその息子アフマツ・ジャクトラ(Achmad Jaketra)がジャヤカルタ王宮の主となったと語られている。このアフマツ・ジャクトラもパゲラン・ジャヤカルタの名前を称したため、いささかわかりにくい話になったようだ。

マルクから戻って来たクーンがジャヤカルタを征服したとき、ジャヤカルタを落ち延びたのはアフマツ・ジャクトラであり、かれはヒンドゥブッダ王朝のスダ王国時代から既に開けていたジャティヌガラに移ってジャヤカルタの後背地を支配し、そして没後ジャティヌガラカウムに墓所が作られた。

もちろん、ウィジャヤ・クラマがラナマンガラによって追放され、家臣たちとともにジャティヌガラへ移って一帯を支配した可能性も十分にある。そして息子の墓所が現代まで残されたなら、上のような現象になることも考えられるにちがいない。この話は余談としておこう。[続く]

「バタヴィア港(23)」(2017年09月08日)

ジャヤカルタをバンテンの直轄領にしてから、ラナマンガラはオランダ人とバンテン間の交渉を開始させた。ラナマンガラはオランダ人を領地から追放することになっていた。だからカスティルを取り壊し、兵器と資産の半分を引き渡し、今後二度と南洋海域にやってくることを約束せよ、とバンテン側はカスティル守備隊に要求した。

オランダ人が撤退するにあたってバンテン側は4隻のジャンク船を用意するので、バンテンに立ち寄って、沈没したデスワルテレウォ号の生き残り60名、ウィジャヤ・クラマの人質にされたブルッケ以下の7人とバンテン商館員の身柄を受け取ってから本国へ帰れという、オランダ側にとっては悪くない条件が付けられている。しかしオランダ人は即答を避けた。

この事態の急変に対してイギリス人はどのような方針を取ろうとしているのか、それをオランダ人は知りたかったから、「降伏合意の内容をどのように実施するのか、その予定を知らせてくれ。」と問い合わせをかけた。イギリス側からの返事はこうだった。

「状況の新展開にともない、その実施は不可能になった。当方は全員が船に戻るのに、いま陸上に散開しているイギリス軍が岸から乗船するさいに、もしバンテン軍がそれを阻むようなら、カスティルへ受け入れてもらいたい。」と反対にオランダ人を頼って来た。オランダ人は予想外の展開に驚いたが、アジア人を相手にする同じヨーロッパ人という一体感を踏まえて、イギリス側の依頼に承諾を与え、そしてバンテン王国に対しては要求を呑むことを表明した。

2月6日、陸上のイギリス軍は平穏無事に船に引き上げた。

2月9日、オランダ人は撤収にあたっての実施細目の打ち合わせをバンテン側とはじめた。打ち合わせを進めている中で、バンテンの示した条件がさらに交渉可能であることをオランダ人は見出した。

どうやらバンテン側もデイルやウィジャヤ・クラマと同様に、正面切つての戦争を避けようとしている気配が濃厚であるように、オランダ人は感じたのだ。優位に立っていることを悟ったオランダ人は、バンテン側が提示してくる条件を少しでもオランダ側に有利になるように、執拗に反論を続けて交渉を長引かせた。

合意内容は変化して行った。クーンが戻ってくるまで、オランダ人はカスティルに居住してよい。バンテンに引き渡すのは兵器50%、財貨25%。今後もバンテン王国との通商を継続する。バンテンに囚われて

いるオランダ人を全員釈放せよ。オランダ人の生命と財産を原住民やイギリス人から保護せよ。それらを間違いなく遵守するというバンテンスルタンのアルクルアンに誓った誓約書を差し出せ。攻守逆転するというのはこのことだろう。

業を煮やしたバンテン側は、ウィジャヤ・クラマの手からバンテンへと移されて依然として囚人の境遇に落ちているブルッケを使ってカスティルのオランダ人を服従させようと考えた。カスティルに送られてきたブルッケの手紙には、「早くカスティルを退去しないと、バンテンはカスティルの住人をはじめバンテンに捕らえられている囚人たち、そしていまだに近海をわけもなくうろついているイギリス船隊にまで、重税を取り立てる意向だ。」といったことが書かれていた。ともあれ、このような交渉が続けられている間は、オランダ人はカスティルに居続けることができるのである。ブルッケからの手紙が届くたびに、バンテンが自分たちの思うつぼにはまっていることをオランダ人は喜んだ。[続く]

「バタヴィア港(24)」(2017年09月11日)

3月に入ると、スマトラから戻って来たデルフト(Delft)とティクレ(Tigre)の二隻の小型船が、商品・黄金・火薬・食糧と十数人の兵員をカスティルにもたらした。そのころには地元民もカスティルの周辺に市を開くようになり、コショウや他のスパイスの取引も行われるようになった。

そんなころにひとりのポルトガル人がジャヤカルタに現れ、自分はチレボンのスルタンを介してマタラム王の特使に任じられた者だと名乗り、マタラム王はオランダ人の勇気を讃え、ジャヤカルタとバンテンを非難し、カスティル解放のために1千隻の水軍と数千人の軍団を派遣する、とのメッセージを伝えた。

そのポルトガル人はそれからジャヤカルタを去ってバンテンに向かい、バンテンのスルタンにそのメッセージを伝えた。バンテン側が驚きをにじませたコメントを返すと、その返答をマタラム王に伝えるため、ポルトガル人は去って行った。

マタラム王からのメッセージは誰もが半信半疑だったが、それはともあれ、自分たちが置かれている状況を全員に再認識させるのに十分な効果を持っていた。マタラムの脅威に対抗するためには、バンテンとジャヤカルタでバンテンとオランダが互いに敵対してはならないのだ。両者は同盟してマタラムに対する共同戦線を張るのが、最善の方策なのである。事態は新たな局面を迎えつつあった。オランダ人はカスティルの防衛力強化に努めたし、バンテン側もジャヤカルタ進駐軍の兵員を4千人超に増やした。追放されたウィジャヤ・クラマも、このまま引き下がってはいないだろう。

ジャヤカルタに立ち寄るオランダ船や諸国の船がクーンからの知らせをカスティルにもたらすようになった。クーンはジャヤカルタへ戻ってくる準備をマルクで整えている。総督が戻ってくるのはもうすぐだ。カスティルの中に新たな希望が渦巻いた。カスティルの住民のすべてが久方ぶりに抱いた安堵感だった。ひとびとはカスティルを守り抜く決意をふたたび固めた。

月が変わったある日、バンテン兵の一部隊がカスティルの防備に関する提案を携えてやってきた。そしてカスティルに入るや、そのままカスティルをその指揮下に置こうとした。オランダ人が黙っているわけがない。激しい抵抗に会ったバンテン兵は命からがら、カスティルから逃げ出した。

4月9日夜半、カスティル守備隊の指揮を執っていたピーテル・ファン・ライとカスティルの総兵力とも言える30人の兵士はひそかにカスティルを抜け出し、バンテン軍の主要陣地2カ所を続けざまに襲撃した。その奇襲は成功したものの、三度も続くわけがない。3カ所目では、既に待ち受けていたバンテン軍との間に激しい戦闘が行われ、オランダ兵士20人が刃物傷を負ったが、すべて軽傷だった。バンテン側は4人の死者を出した。

4月10日、ライはバンテン軍指揮官に会いに王宮を訪れた。昨夜の襲撃はやむを得ず行われたものであり、閣下への知らせが遅くなってしまったことをお詫びする、とライは切り出した。ジャヤカルタ兵とバンテン兵の中にマタラムに内通している裏切り者がジャヤカルタを敵の手に渡そうとして暗躍しており、マタラムはジャヤカルタ進攻の準備を進めているとの情報が得られたため、裏切り者の心胆を寒からしめて動きにくくさせるのを目的に、急遽夜襲の挙に出してしまった、と説明した。指揮官はこの事件についてバンテンのスルタンに対し、つまらぬ誤解によって衝突事件が発生したとだけ報告している。

この日、カスティルにオランダのフリゲート船2隻がマルクから到着した。カスティル内が湧きたつような知らせをもたらしたのだ。クーンが船隊を率いてマルクを出発し、ジャヤカルタへ向けて進軍中であるというのがそのニュースだった。カスティル内に歓声があがった。[続く]

「バタヴィア港(25)」(2017年09月12日)

クーンが大兵力を率いてジャヤカルタに向かっているという情報は、すぐにジャヤカルタの町中に広まった。そして信仰に似た恐怖心がジャヤカルタ兵とバンテン兵の間にひたひたとしみ込んでいったようだ。

オランダ人が行った夜襲攻撃でバンテン側に損害が出たのだから、誤解云々は別にして、バンテン側に損害賠償を要求する権利が生じている。でなければ襲撃の責任者を処罰することも可能だ。だが、クーンという名前を耳にしたとたん、そのような些事は雲散霧消してしまった。バンテン軍のカスティルに対する軍事攻撃の意欲も萎えてしまったらしい。

5月28日、17隻のオランダ船隊がジャヤカルタ沖に出現した。そして、ジャヤカルタの海岸を埋め尽くすように包囲した。

クーンは旗艦プチホランド(Petit Holland)号からカスティルを望んでいた。カスティルはクーンが去ってから5カ月間、まるで何事もなかったかのように、チリウン川河口右岸にその威容を誇示していた。へんぼんと翻るオランダ国旗を見つめるクーンの胸中は、いかばかりだっただろうか。

マルクで捲土重来の準備を進めていた5カ月間、クーンは気が気でなかった。だがかれのもとに集まってくる情報は、ジャヤカルタのカスティルがまだだれにも奪われていないことを物語っていた。あの諸情報は確かに間違っていなかったのだ。クーンはすぐにカスティルと連絡を取り始めた。

5月30日、クーン船隊が運んできた1千1百名の兵員のうち、1千名に出撃命令が出された。オランダ兵は矢継ぎ早に上陸すると、ジャヤカルタの町に攻め込んだ。ジャヤカルタの町の防備に当たっていたジャヤカルタ兵とバンテン兵はそれぞれ4千人あまりいたはずだが、オランダ兵の攻撃に最初から浮足立って

いたようだ。組織的な抵抗はほとんど見られず、オランダ人部隊の銃撃に会うと、死者を残してどんどん後退していった。

そのありさまに、非戦闘員である住民たちも、われがちに町の外のジャングルの中に姿を消して行った。こうなれば戦闘員と非戦闘員が一丸となって逃げ出すばかりだ。バンテン軍指揮官も嘆いたにちがいない。

ジャヤカルタ征服はその一日で終了し、がらんどうの家屋や諸施設が残された。クーンは続いてオランダ兵に命じた。「町のすべてを破壊せよ。」ヨーロッパ人が住むための街をここに建設するという考えが、そのときのクーンの頭の中にはきつと充満していたにちがいない。

カスティルに戻ったクーンは、カスティルを守ったひとびとへの賞罰を行った。カスティルがVOCのために守り抜かれたのだから、「全員よくやった。」ということにしないのが、規律厳守の統率者であるクーンという人物の本領だろう。結果として、規律違反者に対する罰のほうが多くなっただけで、違反の内容によって罰の軽重が異なったわけだが、VOC入社時の階級に降格された者があり、あるいは会社資産への損害責任を問われた者は今後の給与から天引きすると宣告された者もあった。クーンはそれらの処分を規則に従って淡々と決定し、その通りに実行させた。

クーンはまた、バンテンのスルタンに対して、ブルッケ以下バンテンに囚われているオランダ人と関係者の引き渡しを要求した。スルタンが要求を蹴ったためにクーンは一部兵力を率いてバンテンへ示威に赴き、6月6日にバンテンはクーンに降参して虜囚の引き渡しに応じた。[続く]

「バタヴィア港(26)」(2017年09月13日)

イギリス人はバンテンの商館を維持して商活動を行っていたが、クーンがバンテンのスルタンを恫喝するありさまを見て、クーンの報復を受ける前にバンテンから去った。プリンの船隊もデイルの船隊も、一時的に難を逃れようとしてインドへ去って行った。

続いてクーンが行ったのは、バンテン王国の海上封鎖だ。バンテン目指してやってくる船を遮断してはジャヤカルタへ回航させたから、バンテン王国の経済力は急速に衰退して行った。封鎖は長期に渡って継続され、さびれて行くバンテンを横目に見ながらオランダ人の基地となったジャヤカルタの経済力はどんどん栄えて行った。もちろん、ジャヤカルタという名称は間もなく返上されてしまうのだが。

クーンの出生地はオランダのホールンであり、かれは征服したジャヤカルタの町をヨーロッパ人が住むための町に作り替えたとき、自分の生地になんでニューホールン(Nieuw Hoorn)と名付けた。それはクーンが独断で使い始めた名称であり、十七人会の承認は得ていない。

アムステルダムのカーメルに牛耳られているVOC本社つまり十七人会が、アジアに作られたオランダ人の自治区に一地方都市の名前をつけることを許すはずがないだろう。その町こそが、これからVOCが行う喜望峰から日本までの広範なエリアを経営するための根拠地となるのだから。

1621年1月18日に十七人会はその街の名称をバタヴィアとすることを定める命名式典を開催した。そ

の日から、オランダ人がアジアに設けた完璧なる自治領としてのバタヴィアの歴史が始まる。だが、VOCはこのバタヴィアを植民地として設けたのでは決してない。それはVOCの通商と業務管理のためのセンターとして設けられたものであり、この街と土地はVOCという会社が所有する資産と位置付けられた。

そのためにバタヴィアへやってきて住んだヨーロッパ人は基本的にVOC社員や囑託員ばかりであり、全員が会社の規定に基づいて総督館の監督下に置かれていた。つまり駐在員であるために、その私生活までもが会社の監督下に置かれたのである。

たとえVOC社員としてバタヴィアにやってきた者でも、VOCとの契約が満了すれば、社員という立場から解放される。しかしバタヴィアに住み続けたい者は会社の土地に住まわせてもらわなければならない。だから私人として自由にふるまうには困難な状況が長期に渡って続いた。

バタヴィアの命名に関して、別の説がある。クーンはジャヤカルタを征服してから、その町をジャカトラ王国(Koning van Jacatra)と命名し、それを公文書に使い始めた。一方、カスティルの名称をクーンはニューホールンとしたが、十七人会が1621年1月18日にバタヴィア城(het kasteel van Batavia)という名称に決めたというものだ。

ジャカトラ王国の国王は当然、クーンが務めることになる。それはクーンがVOCという会社から逸脱しようとしたのでは決してなく、その当時ジャワ島内に存在しているさまざまな支配権がすべて王国であったことから、ジャヤカルタをバンテン王国の属領から一王国にランクアップさせ、バンテンの属領でなくなったことを主張し、同時に周辺の強大な諸勢力と肩を並べる立場に立ったのだと表明することが目的だったとされている。

言うまでもなく実態は王制でも何でもなくて、VOCが政体を統括する非アジア人の自治都市だったわけだが、少なくとも、その後の百年間は公的な場面でたいていジャカトラ王国の名称が使われたそう。ところがカスティルの名称としてのバタヴィアがその土地の地名と混同されるようになり、町の拡大発展にもなって周辺地域をも含めた地名として定着した、というのがその説の内容だ。

十七人会をクーンは「けちで、臆病で、愚かなヒーレン17」と呼んだそうだが、クーンは「適切な勇気が勝ち得たこの成果を見よ。」という表現を添えて十七人会にジャカトラ王国建国についての報告書を提出しているらしい。もしもジャカトラ王国説が真相であったなら、バタヴィアという名称を持った町が誕生した時期は特定できなくなる。[続く]

「バタヴィア港(27)」(2017年09月14日)

ジャヤカルタの町を破壊しつくしてから、カスティルを守り抜いたひとびととマルクからやってきたオランダ人およびVOC関係者が手を携えて、新しい街の建設を開始した。とりあえずその地名をバタヴィアとしておこう。

バタヴィアの町建設を担ったのは、VOC職員、VOC兵員、ポルトガル人協力者、日本人傭兵、アンボン人、奴隷、解放奴隷、中国人の職人たち、メスティーン、そしてオランダ人に協力するスダ地方地元民たちから成っていた。

オランダ人石工の指揮の下に、奴隷を使って近くの山から石を切り出し、大量の石がチリウン河口の湿

地帯に運ばれた。また海からも巨岩やサンゴ礁が陸上に運び上げられた。町の外側はチリウン川の流れを利用しながら濠を掘って囲んだ上、街全体を頑丈な石の壁で包むようにした。町の中にも水路を堀り、縦横に道路を走らせて橋をかけた。アムステルダムに似せて設計されたヨーロッパ人のための町が、熱帯の地に少しずつ姿を現していった。

カスティルは川に沿って全長150メートルの規模に拡大され、ほぼ同じ長さで内陸部に延ばされて四辺形をなし、高さ6～7.5メートルの堅固な城壁に囲まれ、城壁の四隅には塔が外側へ張り出すように作られて川、海、陸地の全方位に睨みをきかせていた。それぞれの塔は最初オランダの諸州の名前で呼ばれていたが、将来の繁栄を予言するかのように南西の塔がダイヤモンド(Diamant)、北東はサファイア(Saphier)、南東にルビー(Robijn)、北西がパール(Parel)という、南海の宝庫を象徴する名前に置き換えられた。

この第二期カスティルは第一期カスティルの9倍の広さを持ち、北は直接海に臨み、西はチリウン川、そして東と南に濠が掘られて四周を保護され、四辺のそれぞれにゲートが作られた。waterpoort と呼ばれた北側大門と landpoort と呼ばれた南側大門の間は290歩の距離で、また東西方向の幅は274歩だったと記録されている。ランドポートはアムステルダム門とも呼ばれ、そこには濠をまたぐ吊り橋がかけられて、対岸の広場を横切って町に至る道路が作られた。

古い絵図やスケッチ画を見ると、カスティル西側城壁は第一期カスティルの外壁に付けて設けられたことがわかる。そしてパール塔の端にフェイファ門(Vijverpoort)、ルビー塔の端にはデルフト門(Delftschepoort)があり、パール塔とダイヤモンド塔の間には総督用のプレイハウスが見られる。

カスティルの中には事務所や倉庫、VOC職員宿舎や兵営、総石作り二階建ての総督館、参事会役員の官邸、裁判所、教会、兵器庫、診療所、工房などが設けられた。川岸には埠頭が作られてVOCの船や現地人の船が荷役を行い、荷役人夫がカスティルの前庭や倉庫を忙しく往復した。

カスティルの南側には、東西1キロ南北1.5キロの壁に囲まれた都市がカスティルを中に包んでできなかった。その北端はいまのパサルイカンの線、南端はいまのマندیリ銀行博物館の少し南側と国鉄コタ駅を結ぶ線、西側境界はジュラケン川(Kali Jelakeng)東岸、東側は現在のチリウン川西岸になる。

このバタヴィア城市の中は直線街路が格子状に交差し、同じように水路が直線で交差していくつかのブロックを形成し、広い道路の中央を水路が流れて彫刻の施された石造りのアーチ橋が通りを飾った。各ブロックにはオランダ風あるいは中華折衷様式の建物が、大きな礎石の上にレンガを積み、屋根瓦を葺いたデザインで、石畳の道路に沿って整然と並んだ。

この街をユトレヒトと広東の合体したような町だと評した者もある。町を護る防壁はカスティルの城壁と同じ厚さを持ち、防壁には22カ所の砲塔が設けられ、カスティルや防壁以外の要衝にも大口径砲が置かれて、大型砲百門がバタヴィアの町を防衛した。弾薬の備蓄は潤沢だった。[続く]

「バタヴィア港(28)」(2017年09月15日)

このバタヴィア城市から外へ出る城門が南側の防壁に設けられて、警護兵が守りを固めた。その城門の

跡は大門通り(Jl. Pintu Besar)という名前で現代にまで残されている。バタヴィア城市の防壁の外側は、いつ原住民や野獣に襲撃されるかわからない、危険に満ちた世界だったが、クーンは城市の防壁を防衛最前線とせず、もっと外側のアンケやアンチョルなどいくつかの場所に砦を築いて防衛線を構築した。その防衛戦略は10年後にマタラム王国の大軍を迎え撃ったとき、バタヴィアを守り抜くのに多大な貢献をしている。

だがクーンですら、この低湿地帯での水将軍の襲来には手を焼いた。雨季の豪雨や高潮のために街中での浸水が頻繁に起こっている。その悪弊は現代まで持ち越され、ジャカルタがなかなか洪水から縁を切れないでいる状況を裏付けているようだ。

バタヴィア城市の中央を流れるチリウン川、今のカリブサールによって町は東西に分断され、東側と西側はただ一カ所の橋で結ばれた。その橋の位置は現在のインドネシア銀行博物館の北側にある Jl. Bank の橋のようだ。

バタヴィア城市の西半分は中国人やポルトガル人など下層階級の居住地区で、肉・果実・魚などの市場もあった。川の西岸には倉庫が並び、コメ・砂糖・紅茶などをはじめ、入港するVOC船舶のための補給物資も貯蔵されていた。

一方、東半分は富裕な支配者層の居住地区で、テイヘルスフラフツ(Tijgersgracht = 今のチュンケ通り Jl Cengkeh 辺りに掘られていた濠)を中心にして高級住宅地区になっていた。そして、この町最大の目抜き通りもテイヘルスフラフツに沿ったプリンセンストラート(Prinsenstraat)であり、この通りはカスティルから下って来て市街に入り、バタヴィア政庁舎(Het Stadhuis Van Batavia = 現在のジャカルタ歴史博物館)の前庭広場に突き当たる大通りになっていた。ゴシック様式のバタヴィア政庁舎は1626年に建設が開始されて1627年に完成した。政庁舎の左側に教会が建てられたが、1629年のマタラム軍の攻撃で灰塵に帰した。

クーンの適切な勇気は、かれが任期を終えて帰国するまで消えることがなかった。クーンは自己の信ずるVOCの理想目指して闘い続ける戦士だった。会社の経営陣と現場の統率者の間に理想に関してずれが起こることがあるのは、現代でも変わらない。

健康の、ましてや生命の保証すらない南海での勤務にやってきたヨーロッパ人にとっては、手に入る報酬がすべてだったにちがいない。汚れていようがまいが、金の誘惑はいたるところにあったし、往々にして汚れている金のほうが大きく、そして早く動いた。そんな腐敗と汚職に満ちた組織の中で、クーンは職務に忠実であり、忠実であるがゆえに過誤を犯した部下を規律に照らして厳格に処分した。かれは情実に心が動かされる人間でなく、冷めた理性と鋭い見通しがかれの鉄の意志を支えていた。

十七人会の中でも、クーンに対する評価は相半ばした。不屈の闘志と残酷さ、完璧な計画性と集中力に対する薄情な人間味のなさ、部下に能力最大限の成果を出させる統率力の一方で人情の機微に対する感受性の欠如、インスピレーションに満ちた天才かそれとも悪の天才か、果てしない勇気かあるいは暴力と復讐の塊か、ふんぷんたる血の臭い、残酷な野蛮人……

クーンの上司だったピーテル・ボットはかれに好意的な上層部の一人だった。ピーテル・ボットはクーンの人となりについて、信仰心に篤く、人柄は素朴で、勤勉で有能であり、飲みすぎることなく、会議での決断も早く、性格は陽気で、ビジネス感覚は明晰であり、優れた会計士で、尊敬しうる青年である、と評し

た。[続く]